332-78

帝國圖書館藏

東亮印象記

明治
44. 4. 27
內務

西の國のデカダンの詩人に、牛肉と茴香酒の薫あり。

余は日本橋魚河岸の大鮪の切身にも、赤き血滴る詩を思ふ。

昔の江戸人に代る、新しき東京人の起らざる可らず、時を越えるも、世を跳ぬるも宜し。

此書江戸子の爲めに大提灯を持つ、蓋し過ぎし江戸の草場の蔭を照すに非ざる也。

明治四十四年晩春　　兒玉花外識

目次

○都會の色……一
品川の海……四
鈴ヶ森と海苔……六
泉岳寺の香の煙……八
魚河岸と鮪美……一一
夜番の擊拆……一四
長兵衛の墓……一五
閻魔と江戸子……一六
トミルクホールの卓……一八
道灌山の土の香……二〇

目次

男性的九段坂……二一
雨と風の東京……二四
日本橋の上……二五
赤塗の車……二六
青物市場……二七
水天宮と人形町……二八
武藏野の面影……三一
お茶水の今昔……三二
青山の瞥見……三三
枯木に電燈の花……三四
水道橋の畔……三五
豪放な牛込見附……三六

目次

姿の柳橋……三九
奥の礫川の鷺……四〇
兩國橋と國技館……四一
東京の芝居……四三
屋臺店の灯……四四
鯉幟と武者人形……四六
郊外の新築……四七
日比谷公園……四八
目白臺……五〇
道玄坂の陽窟……五一
蛤趣味の深川……五二
傳通院と瞑想……五三

目次

春の隅田川……五五
母子地蔵……五六
亀井戸の昨今……五七
三越の使者……五八
義太夫と浪花節……六〇
業平町と萬年町……六二
紙屑拾と魚腸拾……六三
紙漉く音羽の町……六五
江戸川のスケッチ……六六
唐寺と納豆……六八
須田町の渦音……六九
中洲の明暗……七一

呉服店と劇戟……七二
銀座の肉蝋燭……七三
都の公孫樹……七四
妖艶和洋草花……七五
聖なる領緑苔……七六
飛鳥山の春盡……七八
三崎町の支那人……八〇
目黒羅漢堂……八一
理髪床小見……八三
甘酒屋……八四
新橋の空氣……八五
三河町の人夫……八七

目次

繪葉書と繪草紙……八九
ペンキ色看板……九二
猫さねの漁師……九三
赤門前……九五
水菓子店の色……九六
詩的上野公園……九八
南洲翁の銅像……一〇四
暗い谷中の墓地……一〇四
菖蒲湯と柚子湯……一〇九
永代橋と隅河岸……一一〇
小塚ヶ原刑場の記……一一三
銘酒店の人……一二六

讀賣の女……一三四
雪店の團扇……一三四
蛙の音……一三五
淺草十二階論……一三七
夏の淺草……一四一
新聞賣子……一四八
料理人……一五〇
酉の道中……一五三
苗賣……一六二
都會と柳……一六四
虞美人草……一六六
縄暖簾の酒客……一六八

目次

馬肉屋……一七一
ホトカイ節の娘……一七八
出水の記……一八一
聲色……一八五
大道の蟆賣……一九一
赤提灯の占卜者……一九三
零落……一九五
小泉八雲の墓……一九六
網島梁川の墓に詣づる記……二〇〇

目次終

東京印象記

兒玉花外著

都會の色

人間に感情と外容のある如く、都會にも生命と色とが有る。

私は一日、晩秋の夕陽火の如く紅ゐに東京市を彩つてゐる數分間、活ける大都會、赤い東京市の強い色彩と光輝に感得し、そして醉つた。

古の詩人は天地自然の美に惑溺して歌つた、現代の吾等は內外の發展しゆく都會の爛美を、口を極めて謳歌したい。

人は俗惡と貶すかも知らぬ。が、私は東京市の色々のペンキ塗の看板や廣告柱

を以て、市を飾る花だと思ふ。美人が化粧を凝す如く世界的都市は盛裝する、屋根瓦に咲出た此花、それが悉く生活の色と競走の呼吸をするのが如何にも面白い銀座の大通りから須田町、神田小川町から淡路町、上野廣小路附近。歐風、日本式、アイノコ流、大小開放しの綺麗な商店の軒看板、赤青紫黄、白地は目立つて夥いが、私は現代勃發しゆく文明を象徴する色として赤を以て勝としたい、否赤が第一到處に塗られてゐる。電車停留所の赤柱、心に待たるゝ郵便函の赤塗はうれしい、振つてゐる。

東京の代表的色彩が赤ならば、大阪が黄陰氣な京都が青であらう。どうしても、土地の人氣風俗を其服裝に見ると一緒に都會にも何かの色に爲つて明確に現はれる。目下流行の女持洋傘の色一つでも警眼には近代女心が知れる。

今は物淋しい秋の節だ、而も都會に居ては私には怎うしても秋といふ感を味はれぬ、餘りに大都會の進捗しゆく生命活動力、眼を射胸を燒く色彩が強いからである。頭腦の舊かつた歌人俳諧師輩が夢みた徳川の城下、月に泣いた秋の武藏野が斯うまでに變つたからは、電燈は無論今に赤青紫のイルミネーションが月光美を褪ふだらう、私は詩の心から驚ろく。單り東京市の重疊羅列する家屋、巨獸の如く吼走る自動車が横行する大道のみで無く、人間の眼も底から強くせわしく光つてゐる。「文明の途に行く人！」個人的に觀れば悲痛もあらうが、世界人文の進歩發達の上からは寧ろ微笑を顏面に湛へ强者と爲て進まねばならぬ。

佛國の詩人ボードレールが極端なる人工美を謳つた如く、今日の東京市をして飽く迄物質的に美觀を呈せしめよ。目に綺麗な物を見刺戟ある匂ひを嗅ぎたいのは現代人の慾望だ、國も富むで我等は地上に極樂を見たい。

俳句は兎まれ、今日進むだ短歌や長詩が題材を都會中心に採り歌ふ樣に成つたのは、我が文壇に非常に愉快な事と思ふ、近代的情調と色彩と光熱の溢れ漂つてゐるのは嬉しい。金鑛の坑夫が鶴嘴を揮ふより烈しい努力で吾等は詩を大都會に

探るだらう、近代の詩は割つて見ると、皆赤を帶びてゐる。

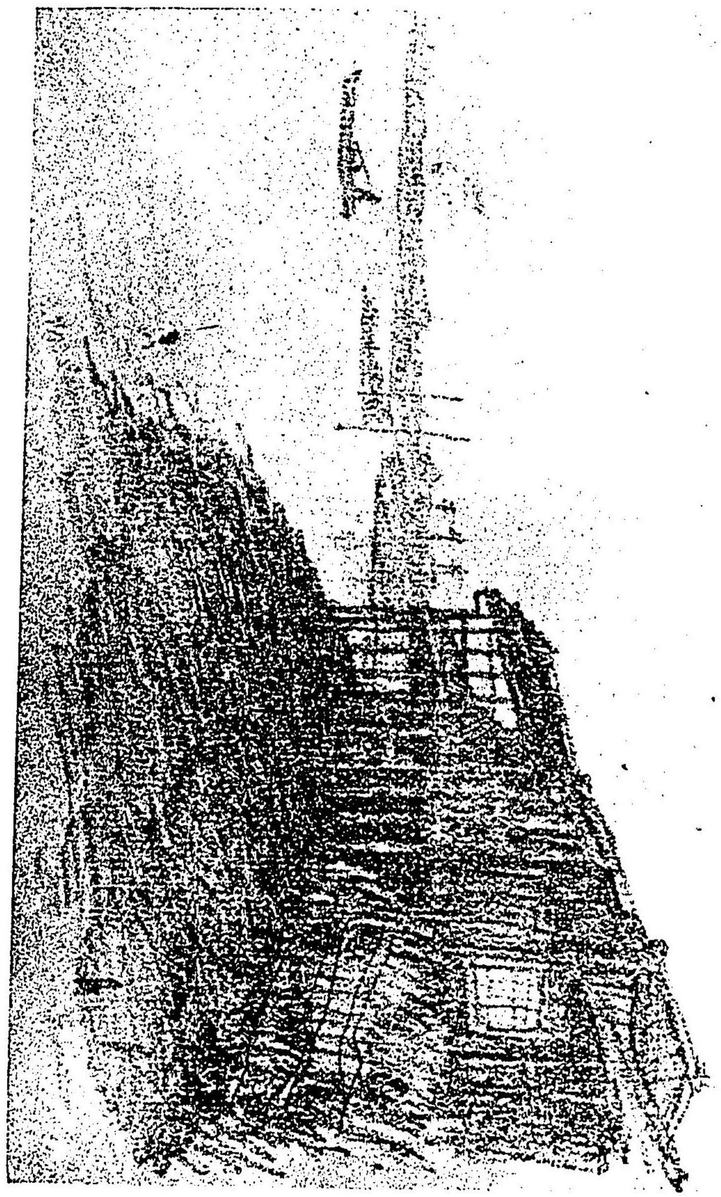
田舍を歌ひ、清新なる趣味を都會に注ぐ詩人は別に在らう。強い、艶麗な、暗黑もよし、活ける生命を歌ひたい、私は都會を愛するのである。

雄壯なる七海を謳ひ機關を詩に作つたキップリングは偉きい。飛行機に試乘をしたのは流石は近代文豪ダンヌンチオだ。折しも淋しい秋色を壓して熾盛なる東京市の赤色を私は舌の限りに讃美する。

品川の海

少しダラ〳〵阪になつて、路幅は廣くはなく、昔し東海道を菅笠に、脚絆扮裝の旅人が、セッセと歩急いだ、廣重の繪にある面影が偲ばれる。

黛みを帶びた土の色、兩側に建並ぶ古風めいた家屋、特に磨きをかけた樣な、飛々に離れても在る品川遊廓が目に立つ。大抵紺と淺黄の店暖簾の垂るのも風雅



に床しく、物靜かな海邊だけで、空が靑く、そして空氣が莫迦にすが〳〵しく輕い。

維新當時の、例の七砲臺の邊りへ、寄せる波も、返す波も、有るか無いか程淺は、頗る穩やかだ。沖の方に黑い、白く塗られた大型小型の蒸汽船が碇泊し、また何處へか夢か謎の如行くもある。平地の小高い臺場跡に、白いペンキの圓い建物が見え、なにかの工場らしい頻りと煤煙が吹揚つて居る。

品川灣內はゴク靜かな海だ。小い漁りの舟釣舟は、竹竿なぞ立てゝ浮いて居る、珍らしく三角形四角狀の、赤い色灰色の小い帆を擴げた儘、歐式の舟もジッと動かずに在る。太陽が明かに木綿のズック帆に射込むでゐる。赤い帆は激浪に可。

品川は、魚は無論新鮮で佳い。町の入口に、五六軒も二階屋の料理店が並ぶ。店頭に常も生々した鱗艶な小鯛ちぬ鯛、穴子、烏賊、眞珠の粒に似た貝の柱、此處の名物とあつて、蛤の生々しい剝いたのはドッサリと薄笊に並べて在る。——

食道樂の是非見遁す可らざるは、この蛤鍋だが、實は蝦蛄鍋も品川の名物で、這奴は宛で海老の怪物が私生兒的で姿は大に醜いが、喰つてしこ〳〵甘味が有つて、これで一杯匆々馬鹿にできぬ。市中の小さな飲食店にでも、蟹と蝦蛄とは食はせる。

東京から電車を降りる終點、八ッ山下、高い土手樣の路端から海の方に向くと、スグ眼下に品川驛の鐵道線路が紆つて光つてゐる。數知れぬ澤山の白い形の鷗が、灣内に鴨と入混つて、白黑の羽根が波の畦りに甚だ美事だ。

汽車の白いシグナルが、起つ鷗浮くかもめとの對照が如何にも奇である。

鈴ケ森と海苔

我舊日本の、或方面の人情に囚はれた、熱烈赤實な女性の好標本として、八百屋お七が火炙の刑罰に燒死むだ、昔の鈴ケ森は、慓悍腕白であつた若い武士氣質の權八と、俠客根性の長兵衛の物語噂としても、今に東京近い海邊に遺つてゐる。

例の髯題目、波が萬古に岸を洗つて、白く打寄せて來る、狹い海道の傍ら、大きな南無阿彌陀佛と刻むだ、高い石碑が建つて居る。太い性の曲りくねつた松は在るが、影暗い藪蟲が何となく凄く、寂しい。

御維新まで、此仕置場で、幾百人の罪ある男女が、鈴ケ森の朝露と消えた事であらう。牛馬の骨の捨處、駒も一度は泪を流すと謂はれた涙橋——房總の山がいまも灰色に薄ぼんやりと見える。

その山の當りからか、潮波に乘せられて、海苔が粗朶に掛る、品川名物の青海苔が採れる。

東京名產の淺草海苔も結構だが、人情に乾いた私には、一切、お七の赤い火の緋鹿子のやうな腸と、長兵衛のドッシリした義腸が、千金の價舌に嘗めてみた

い。

○ 泉岳寺の香の煙

高輪泉岳寺、入口に、自然石の表面に、萬松山、四十七義士舊跡と、血の如な眞赤な朱字を入れて彫つて、案内として建てゝある。

門までの細い兩側は、舗の玩具の人形も義士で、陶器も德利盃に大石家の定紋を金で燒いて賣る。軒の暖簾を、義士討入の時の白と黑とダンダラ染にして、雪の夜といふ汁粉店が在る。矢張り義士の色彩した綺麗な繪葉書を售る。

門を拔けると、左が即ち四十七士の墓所で、常夜燈の處を進めば、義商天野屋利兵衞の立派な石碑だ。小い又入口を潛ると、せんかうつける火と木札に書いて、カンテラの煤烟が黑く凄味に、火がチロ〳〵と熱誠の色に燃えてゐる。

淺野長矩侯と室との靈塋に隣つて、赤穗藩四十七人の墓石が、小高い段地に並

立つて居る。大石父子のは兩隅に屋根の一構へに爲つて、石面に、淺野内匠頭家來大石内藏助良雄、忠誠院刄空淨劍居士行年四十五逝、更に元祿十六癸未歲二月四日と刻まれ、他の同士のは武夫の四角形に取圍む。そして小形の墓石は、孰れも蒼黑に古びてゐる、例の堀部安兵衞のは刄雲輝劍信士行年三十四逝、赤埴源藏は刄廣忠劍信士行年三十五、矢頭右衞門七敎兼の刄擲振劍信士は最も勇壯、悲壯凜として名が振つては居るが、其の行年僅に十八と云へるは、主税良金の十六歲と共に、實に感ずべき美少年の床かしい極みでは莫いか。常手向の榊の綠葉に、自分の熱い泪がたばしり落ちた。

君恩義の爲めに死むだ、何れ劣らぬ四十七の墓前から朝々暮々、年中燃騰る香の煙は、白う濛々と棚引くやう合して、松や高い樹の間を立昇つて、眞に靑い空に貴尊い天雲と化るのである。

泉岳寺の墓地は、少しも陰氣な濕ッぽいこゝちはせぬ、併し之も男性力に富む

だ義烈の氣の德であらう。諸國から旅人の四季に足跡の絶えぬのも、敢て無理ではない。

義士木像は別所にある、銘々三五尺位の像で、立つてるの、座つてるのも、誰が作かは知らないが、各自の性格氣象が活けるが如く、色が施され動いてゐる。試しに是等木像の堅い腹を切つたら、ダク〳〵と眞赤な血が滴出さうに思はれる。少くも當今の人間より、像は血が多からう。

表所に、主税の梅てふ至つて古木が有る。之は當時松平隱岐守三田邸に御預となつた、十人の内大石主税が、此樹の下で自刄した、潔い緣りの梅の古木だとか、花は昔に散つて最早咲くべきもない。

側にすぐ、義士遺物展覽場が在る。四十七人の記念物は、吉良邸内に討入の裝束、鉢金、鎖襦袢、腦當、及び大小刀、槍の類、山鹿流の朱塗の巨陣太鼓等、珍重な物が饒山に列べ覽せられる。今なほ元祿極月十四日雪夜の悽い光景、敵味方

の血潮が、班々と殘つてゐる心地が爲る。

特に面白く振つてゐるのは、安兵衞書の齒磨屋及びはけやの看板と、大高源吾の酒屋の看板である。

泉岳寺は、我が血性男兒が永久に忘れられぬ、清高な且つ熱氣を藏む大墓地である。

魚河岸と鮪美

日本橋、魚河岸の景氣は大したものだ。早朝の河岸は、方々の海から上つた澤山の魚と、人間と一緒に、狹い所にゴッタがへして、魚鱗の閃めきと、人の聲と混戰の有樣であるのだ。

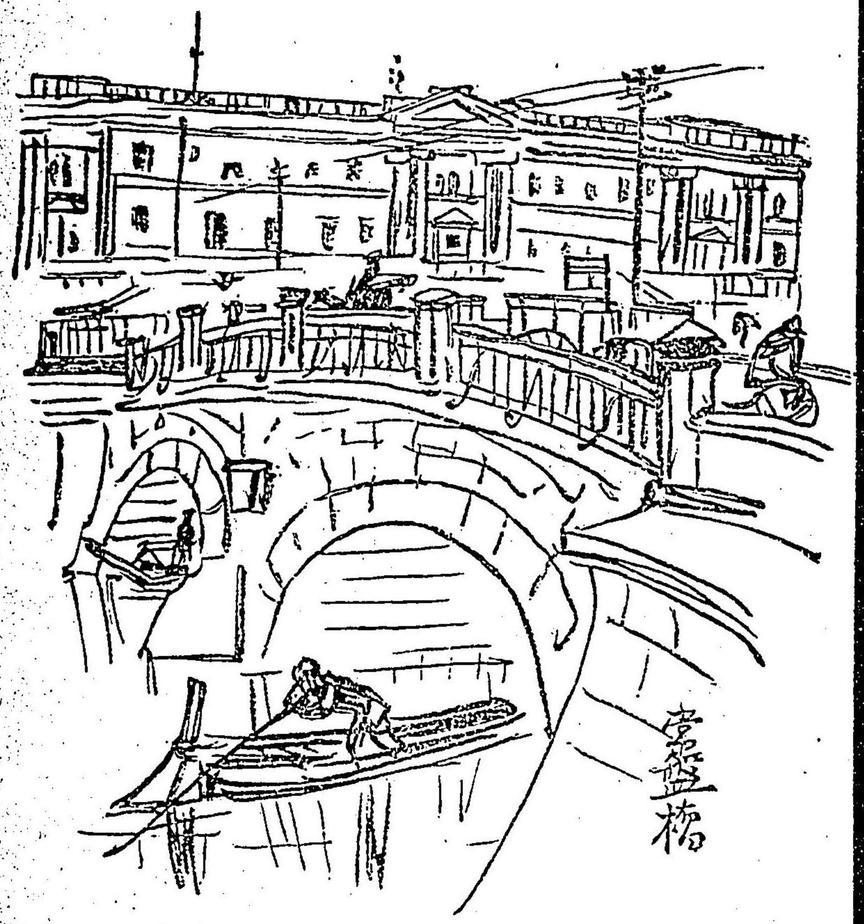
晝頃通つても、其の名殘りが、種々の魚類が置捨てのやうに爲れて在る、籠や何かと狼藉の態だ、まだ活きた魚が、小石と轉がつてゐる。

河岸は、上部が白く塗つた、納屋様の家が續いて、河岸の人は、紺の鯉口を着た、甚だ威勢の好い兄哥風の男、深い帽子の頭に捩鉢巻の若い者、行動は荒々しいが、一人として蒼い顔をした、弱虫らしい神經質は見附らぬ。孰れもピン〳〵飛游ねた、生粋の東京ッ子、江戸ッ兒を以て看板として居る。唐棧の袷三尺帶を前結びにした、角刈の鯔背な若い男に會ふ。

此處には、市内の店で見る魚は、其節期にはいつも丘の様に積まれる、秋刀魚の折杯には河岸一帶が、鮮かな銀色で光つてゐたに驚いた。

河岸の屋臺店、壽司の立喰は名物だ、髭が赤い鮪のにぎりを畳間でもバクつく、天麩羅でも日本橋の立喰は天下御免である。

横町には、大きな魚問屋が在る。廣い土間に六尺位な巨鮪が、何時も六七本もゴロ〳〵轉がつて有る豪氣さ、こゝは亦素破らしい景氣だ、黑海の一切が横たはつてる様だ。



那の黑い皮の下、眞紅な肉を包滿されてゐる大鮪！鮪は無論鯨には若かぬが、海洋の魚族の王だ。死むで魚市場の石庭に横たへられても、首尾長く堂々として、魚王の價値を落さぬ、大海で暴れた姿其儘であるのだ。

自分は魚市場は、之れだから好きだ。死むで東京市民に、赤い脂濃い肉の切身を、大勢の人に分つて喰はせるのは、俠客的で振つてゐる。何だか水野宅の幡隨院長兵衛の最後を思はせる。魚でも鮪のやうならば、平凡の人間共よりか豪く勝つて居る。

其他、蒲鉾屋の內庭には、大鮫が數十尾も並ぶ、これも形狀に恐ろしい凄い所が、蒼灰色の皮膚に殘つて、象徵された魔力の存する詩を想ふ。一體蒲鉾屋ほど、元氣な威勢のいゝ商賣は無い。厚い廣い俎板の上で、長い大庖丁を振つて、矢鱈無闇に陽氣な音を爲せる、そして高い調子が莫迦に、生魚の白身と匂と、人の氣を引立てさせる。トン〳〵カタンの響が、魚河岸全體の空氣を震はせるやう

だ。大きな石の摺鉢の周りに、若い男が七八本の長い白棒を突立て〳〵、シュッ〳〵と勇ましう拍子を揃へて、雑然の生身を摺合ふ有様は、白に黒い腹掛で、荒木の棒の動くのが正に江戸ッ子の本色を見せる。

狭苦しい地面は、常にジメ〳〵して、縄や木片や藁屑が、コダ〳〵散ばつて、氷の缺片などが落ちてゐる。大馬鹿か何か分らぬ真黒い貝の缺片が光る。

鹽鮭の如きは、山程積むであつて、宛ら海潮が押重なつてゐる様だ。

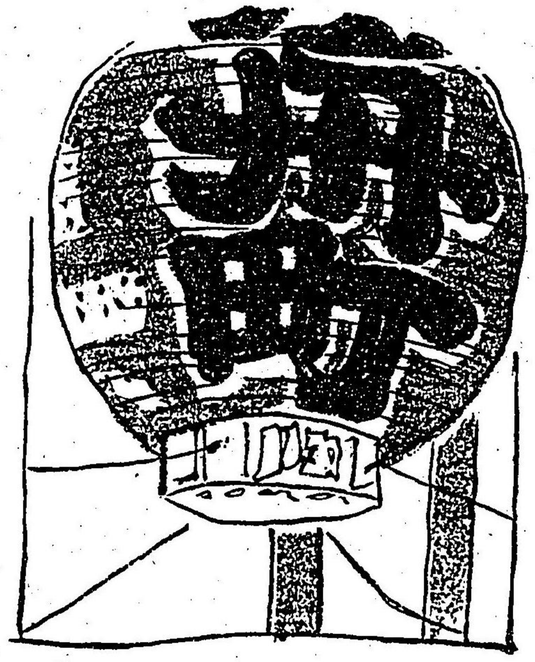
譯の分らぬ怪巨魚が、木と縄とで胴を尾まで捲いて置かれる。

日本橋河岸に、生粋の兄哥江戸ッ子と、東京人の好く魚が海から上る。

㊁ 夜番の擊拆

東京、夜の擊拆の拍子木は、頗る詩味に富むだ物だ。

宵の口から、寂しい暗い、山の手、下町でも、黒法師の夜番が、カン々々カ、



ン！と拍子木を打叩き乍ら、街道を通るのは、中々神秘的で情のあるもので有る。

市の屋根瓦、道にも霜白く更けた夜は、犬の遠吠と、怎うしても、詩中のものだ。夜番の拍板は、家の構造と、やはり廣い東京の事だ。分けて江戸時代を思出す。昔の勇ましい金棒、深夜町の角に火の番が障子の裏に射す油火も佳い。

私は日本橋、京橋邊りの、冬の夜遲い、老人の夜番の、巧く叩く拍子木の音を、一度聽きたいと常に念つてゐる。

諸々の罪惡も行はれる、夜の東京に、斯んな神秘的な、ローマンスの音響も有る。

睡さうな、鍋燒うどんの聲は、町を離れて、妙に拍板の木の音と調和する。

長兵衛の墓

俠客、幡隨院長兵衛の墓は、淺草清島町の源空寺に在る。

古い寺の門を入ると、突當りが本堂、その前の左手に、長兵衛の墓がある。墓は背の高い、青色の自然石で、立派に幡隨意長兵衛之墓と、深く刻込むである。翠の色濃い格好のいゝ男松が、傘の如うに石碑を蔽うてゐる。俠客、長兵衛の辭世が石に有る、その側に小い妻女の墓が立つ。

高い石碑の裏面に、故市川團洲を筆頭に、諸藝人の名が細く豆の様なのも、何如に彼等の崇信心が知れる。

向ふに、朽廢しかゝつた、古い鐘撞堂が建つ。淺草俠客の墓から、此の錆た鐘でも、ゴーンと一つ二つ撞鳴らして、頃日人情浮薄の、都會人の夢を破醒したい心地が爲る。

閻魔と江戸子

東京人が、お閻魔様を拜むのは、江戸ッ兒の行りさうな事だ。

閻魔の名高いのは、淺草、小石川、新宿にも、嚴めしく、祭つて在る。今年の正月には、參詣した東京の男女は、大變な雜沓であつたさうな。

世の中は、地藏樣を拜むかとみれば、反對に恐ろしい閻魔の前に、願を掛ける。上方の人が聞いたら、驚くだらうが、全く氣の荒い、負惜みの強い、物好きな江戸ッ子の、喜むでやりさうな事だ。下町の人間や、緣起を祝ふ力士藝妓連に、お閻魔參詣が多いのだと云ふ。

寒中の夜半に、白地の單衣一枚で、寒詣りを行る東京人は、次第に依ては平氣で火にも飛込む。閻魔を禮拜するのは不思議でない。

併し、緣起とか、幸福とかは、平凡無事でなき、閻魔樣のやうな中に在るのかも知れぬ。

江戸ッ子の半面は、旋毛曲りの、こういふ所で覗はれる。

ミルクホールの卓

新聞縱覽所と一品料理

ミルクホールは、神田本郷學生を相手の所に多い。名の通り牛乳を賣ぐのだが、カステーラ菓子も置かれる、狹い室内は、牛乳の臭ひが空氣を甘くしてゐる。

ミルクホールと、新聞縱覽所と大抵似た物だ。縱覽所は少し規模を大きく爲たので、雜誌類も有り、麵麭、一品料理をも行る。

所によると、ミルクホールに廂髪の、怪しい若い女が居る、牛乳の故か顏が生白い。酒に醉はぬ青年でも、乳に醉はされるハイカラ學生も在る。

純然と、一品料理許りの家は、西洋料理は一通り出來る。小ヂンマリとした家に、表硝子に赤で一品料理と記るし、室内には無論卓に椅子、ビール正宗、林檎

蜜柑位の用意はある。美人の廣告が吊下げて、いや、活きた女が腰掛けて酌も爲る、淺草當りには、佛蘭西の酒場もどきの、眞似だけの一品料理が有る、ウヰスキーの壜が棚に光る、頭髮の安香水と白粉が匂ふ。

入口に白い金巾の垂つた、一品料理は、西洋の貧民街の場末を聯想さす。平民的で、駈込に便利で、詩味も有る。一品は大抵七八錢だが、馬肉を喰はす所もあるとか、コックの手腕もあやしい、世間で事業の失敗者が主人の氣持がする。

下町等に夜更け、テントを張つた樣な、一品料理が出てゐる。氷るやうな寒い夜、熱いジイッと安バタが燒ける臭が、闇の道路に煙つてひろがる折、饑空る腹を抱へた勞働者が、甚麽に鼻に强く刺戟されるだらう。漂泊者とテントの一品料理、正に廢頽的の詩情がある。

都會に數階の西洋料理、美人の白い手の多いビーヤホール。之に下級の、髮と口髭をモヂヤ〳〵した主人の一品料理も、異つて面白いではないか。

道灌山の土の香

英雄太田道灌に因むだ、道灌山は月夜に良い。而し秋の落葉する前の、樹の匂を私は殊に愛好する。

露西亞のツルゲーネフのは、榛木等曠野の香を、那の感能の強い鼻に嗅いだが自分は夫程でなくも、道灌山で、我國の秋と樹と草の匂を、心ゆく迄に嗅ぎ味ふ事ができる。

道灌山の、餘り堅くない、粘りのある赤土も可い。白い薄が瘤の如な處に、シュッ〳〵と亂生してゐる、月の夜に虫が露に噎むで鳴く。

道灌山に花を尋ねても無駄、一面の樹と草と、土のかをりを臭ぐべしである。

都會の街道や瓦の香よりも、道灌山の土に亦野生的の面白味が有る。——百姓が向ふの畑地に鍬を把つてゐる。

空の晴れた日には、紫の筑波山が望まれる。

道灌山一輪の月に、塵の生命の洗濯をするも宜い。

男性的九段坂

九段の坂に立つと、心氣活潤になる。青天無限に四方に伸びて、春風凧の高く飛揚する頃には特に佳い。

靖國神社の境内、櫻花の折には、白銀の世界を綴る。樹木の植込整然として、都下心地のよいと第一の公園だ。神社の裏の池に近く、共同ベンチの東屋、新聞を覽てゐる人も詩中の物、池の中の童子が鯉魚を抱く鉄の噴水は、眞に男らしく、春雪が肩と鯉の鰭の邊りに、殘つて凍着いた趣は凜々しい。公園の樹木は、四季絶えず新鮮の呼吸をしてゐる、田舍上りの疲れた旅人が、此の東屋の椅子でウト〳〵、晝の快よい夢に入るのを見た。

横の門を出ると、名もゆかしい富士見町、塵も揚らぬ道、西の方を向くと、白銀の芙蓉峯が遠く甲州境に靈姿を現はす。山波が白雪と白雲と、一緒になつて、富士を高く隆起した中心に、山脈と雪と雲との蜿蜒と長い、大波瀾を天際に捲おこしてゐる。此の光景を望むと、こゝより家も無く、櫛比鱗の如うな麹町區の瓦屋根を一足飛びに超えて、直ぐ雪の富士へ達くやうに想はれる。富士見町とは最も好適の名だ、一體東京の町名は、阪でも橋でも、景趣に似合ふた、所謂詩的の名が附けられてある。都會の小兒でも日常、途に立て富士を觀る杯は、敎育上自然からも知らずも學ぶ。揚つた凧の向ふに、雪の不二が見えるなどは、御伽噺式だ。麹町區は富士がある爲めに、詩化されて居る。

高い巨大な、銅柱の華表を拔けると、其處は例の境内の廣場だ。大村兵部卿の陣羽織姿の、嚴然たる眞黑い銅像が、眉目活けるが如く睥睨して居る。此人は彈丸雨注の間を、高足駄の傘で鼻唄を謠つた、詩人肌の英雄で有つた。鐵の矢を

柵とした銅像臺の根元、横たへて在る大砲に、三人の青年が腰を掛けて、キットした眸で天の一方を睨めてゐた。

此の境内は、靖國神社の祭日には、非常なる人出で、撃剣、劔舞、見世物、及び活動寫眞が盛に興行される。毎年定つて來る男女の諸國放浪の劔舞師も有る。

愈よ境内を出る、こゝが所謂九段坂で、神田一面を一目に瞰卸せる。坂の下方隧道のやうな處を、青山新宿行の電車が、鈴は鳴らすが夢の如うに辷つて通る。濠は青く綠の樹木が繪のやうだ。折々兵營で吹く喇叭が聽える。

稍傾斜が急の九段坂は、車も人も絶えた事は無い。此の阪は四圍の風物、見るもの聞く物、悉く男性的だから、車聲、足音にも、一種の高調を覺える。白晝でも坂の中途に突立つて、朗々と詩吟を爲れば、聲は忽ち波動して、遠くの空の雲に入ると思はれる。

坂下に古い鳥屋がある、永く小鳥を賣る、赤い鸚哥白い鸚鵡が居る、之も九段

下の名物の一つだらう。

○雨と風の東京

上州の空ッ風と謂ふが、東京の風も隨分と烈しい。八百八街を吹き捲くる。秋冬、四季共同したが、櫻の花が咲く、春先になると、風伯は袋の紐を緩める。家も人も溜つた物でない。

上天氣續き、所に據ては、忽ち萬丈黄塵の濤が起伏する。通行人の眼も鼻もあつたことで無い。而し昼吹いて夕景、強い痙攣が收まつた樣ケロリと歇む。東京の雨は亦甚い、大抵は何時も斜めだ、眞直ぐでも、西京での絹の如に柔かに降つて來ぬ。風の奴が手傳ふからだ。

烈しいッたら、雨は所謂横頻吹きで、袂迄ビショ濡れで、迚も外套無しには歩けない。傘も奪られさうな折がある。

筑波颪しは寒く、雲の急な變化、激しい夏の夕立は、兩方東京の名物である。雨と風とが、江戸ッ子式に出來てるのも、奇な緣であらう。

日本橋の上

日本橋は、目今架設中だ、此が出來上れば、大都會の日本橋として、何樣に內外の人目を驚かす事であらう。費用は五十萬金と聞いてゐる。

一寸假橋に佇むで觀る、大橋の工事が、最早最後に近づいてゐる。眞白い、何如にも堅固さうな長い石橋が、南北に架つて、まだ石工がコチ〳〵と鑿を振つて居る。

高く組立てた棒木、工夫がセッセと働いてゐる。深い杭に浸込む濁つた泥水、架橋に努力と勞役の加はつた事は、一目で判る。

無論、電車は目貫の場所を走つてゐる。

假橋から、東の河岸の方を見ると、會社の白塗の倉庫が屋根を並べ、水上、幾艘とも數しれぬ荷船が、腹を漬けて泊つてゐる。

以上の光景は、飽かぬ廣重の名所圖畫中の物だ。『御江戸日本橋七つ發ち』の唄を懷出す、詩興が酌めども盡きない。橋に高く麒麟の素晴らしい美事な彫刻が着く愈よ、日本橋竣工の曉は、大都會の雪白の長橋、永く東京人の矜誇となるだらう。

赤塗の車

郵便馬車が赤塗になり、自轉車も赤、東京の各商店の箱車は、大概、朱塗白塗、それに金字の商號商標を表はして、華やかに、美術的と爲つた。

化粧小間物屋は第一に、孰れも箱車迄も、塗飾つて景氣を競ふ。寂しい山の手の道端にも、赤塗　金字の車が置捨てゝあると、嫌な感じはせぬ、垣根に山茶花

でも咲いてたら、俳句位の値打は有らう。牛乳屋と麵麭屋とは大抵、白塗に赤黒位な所だが、私は此の配達する牛乳壜と、麵麭には、頗る常に詩味を思ふ。いつか小説に、牛乳と麵麭を盗喰つた、貧民のことを讀むだ。

鼻唄で馬士が、デコボコ道を荷車も面白いが、都會大路を、綺麗に塗つた商店の箱車が走るのは、極めて乙なものである。

併し、一面現代は、商品の函車でも、人間と同樣外部ばかり、赤と金に塗り飾る流行だ。

髪の如な眞直い大道を、白地に花模樣の箱車が一臺駛しつた。

青物市場

青物市場は、神田多町に在る。新鮮な青物と、神田ッ子とは、何等かの交渉があるまいか。然し乍ら、夫れは氣持が淡泊のアッサリした事で、あざやかな、綠

色の男らしい氣風を言ふので有る。

魚河岸よりは、町幅は少し廣い、冬から春ならば、蜜柑の木箱が、兩側の問屋に山積にされ、朝には種々の季の青物が、荷車に搬ばれて來り、又去る。

此處も屋根は、黑い土藏の樣な建方だ。袢纏着の兄哥や、股引や、帽子、鉢卷、入込むで來た者は、塵埃をかまはず働いてゐる。

地面に藁や繩や何か、ゴタ〳〵と、犬が遊戯れてゐる。空氣は大抵汚れてゐるは仕方が無い、喧嘩早い神田ッ子は、此處に住むで居るのだ。

業務の暇な折は、辻講釋が、ガランとした店の土間で、例の張扇子を叩くのを見る。

都會人の血を清新にする青物は、氣が早い神田市場から——。

水天宮と人形町

水天宮は、日本橋人形町に在る。東京の中でも、年中老若男女の御詣りが、意氣な下駄の音と、敷石の上に絶えぬ、東京でも有名の神樣だ。

ガッシリした、白木で建繞した、大きな水天宮樣は、境内に塵一本も落ちぬ、掃除が行屆いて潔齋清淨に、如何にも江戸ッ子の禮拜尊重措かぬ、威嚴の具はる神殿である。堂々たる巨門の内、高い唐銅に金巴の紋附いた、燈籠が二基建つて在る。

日本橋下町の中でも、最も男女の意氣と艶ッ氣の多い、人形町に御座を据ゑられるのは、中々振つた神樣だ。此邊りは、下町の純の純な、人間も何でもピリ〳〵として、潑ねん計り活々してゐる。水天宮の御符が、紙幣よりも貴重せられるも無理はない。

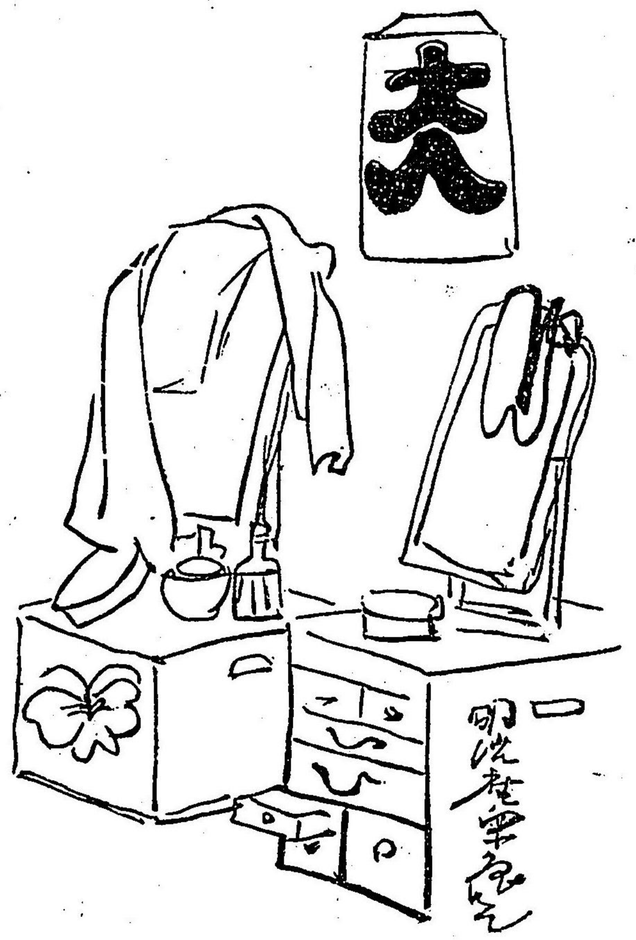
江戸ッ子は、縁起でも何でも、威勢のいゝ、氣の荒い、陽氣な神樣を好くやうだ。

昨年戌の年戌の月日と、三拍子揃つた當時、逸早く御符を頂戴うと、水天宮の門前に、人波打つて、御守符の奪合ひに、人死に迄もあつたとは、到底も東京でなくば見られぬ。尤も亂暴は宜しくはないが、江戸ッ兒の價値も亦此邊に有るのだらう。信仰と意地張の爲に、火の中へでも飛込むのは、やはり江戸ッ子だ。

人形町は廣い兩側の商舗、飲食店も、きれいで瀟洒として、店の飾附は、銀座當りと全然違つて、純舊式の日本風な所がある。空氣が輕く且つ艶な氣持がする。土も一種の江戸懷かしい香が殘る。

此町の女は、廂髪等は餘りに見ぬ。同じ日本髷の銀杏返し丈けにしても、結方が意氣で、品はなくても、如何にも粹で仇ッぽい。東京下町の娘の、美しい標本は、此處で無くば見られぬ。薄化粧を以て一種の誇として居る。

寒い日、縞の筒袖、紺足袋を穿いて歩く、世話女房も有る。その代り、女の兒は厚化粧を爲る習慣だ。まだお染式の生娘をみる。



水天宮の裏が、常も金錢が鳴る蠣殼町、――高等白首の出沒する魔窟が在る。之も東京の變化の繪の一つだらう。

武藏野の面影

郊外に出ると、冬の枯木の時には、殊に舊武藏野を思出させる。榛木や栗や、打續き飛び〳〵に、雜木林が在るのは、兎ても廣い武藏野でなくば見られぬ。

春と夏、木の芽が出、新綠燃えるやうな頃は亦、武藏野の地も空も、青葉若葉が焰の如で、生氣が活動して、反射が都會迄でも綠に、目が覺める許りである。

秋の七草の頃、多摩川の附近は、女郎花、桔梗、銀の薄が、小松の間に簇生して、今でも駒と鎧武者でも飛出しさうな氣持が爲る。村から村へ、斯んな所は幾らでも、現はれる。

東京に、何程家が建伸びても、今に武藏野は、やはりその面影を改めぬ、郊外

の樹木と土は、熾盛んに自然の力を誇る。

東京の大都市の、屋根瓦を照す月は、昔の武藏野の上の潔よい月である。町奴が眺めた月である。

春さき、東京の道路の空ッ風は、旺勢な武藏野の名殘りの氣息である。

お茶水の今昔

小赤壁と唄はれた、お茶水橋も變つた。

あの深い溪のやうな、兩側の赤味を帶んだ土の崖も、色迄で異つた樣だし、否流れる水の色も俗臭くなつた。そして高い兩岸の樹も、堤から繁り茂つた木は伐拔かれ、干乾びた呪れた空氣に、草は喘いでゐる。

十幾年前、お茶水が、まだ赤壁と言つた時分、私は飯田橋から小舟に乘つて、眼鏡橋まで行つた事がある。無論乘合舟で、人の善さゝうな船頭が懷かしく思ふ。

私も無我の書生であつた。

夏の夕景は、舟が涼しくして塵もなく愉快だつた。

お茶水も、電車が橋の上を通る。殺風景と無趣味が、高い兩岸の樹木を嚙拔いて、遂と神田名所のお茶水、小赤壁を代なしに爲て了つた。

方々に公園が、出來たにしても、神田に一個所位は、趣味の窪い、文明人が氣を伸び〳〵させる、深い溪と樹との赤壁を、面影位存して措いても宜しかつた。

舊と變らず、駿河臺ニコライの白い高壁は、雲までも聳えて居る。

青山の瞥見

御濠端、池に松が翠綠に影を寫した、赤坂見附。電車の停留所で靜雅なのは、爰が東京第一と思ふ。

演伎座の在る、溜池の方へ往かずに、芝居の書割のやうな、洗ひぬいた風で粹

な待合に折れずに、赤坂停留所から眞直に、豐川稻荷、青山一丁目に線路を出る。

青山といふ名から、最う感じが佳い。廣々した周邊が清淨で、零圍氣が何となく青味に、大空の青と、キビ〳〵して波うつてゐる。

青山の通から觀た雪の富士は、麹町からと違つて、甲州に近く更に神々しい、遠方の白雪が袖にうつる。

練兵場からの富士は、銀の大芙蓉峰が、武藏野の木立の上に、姿勢よく、手を伸ばしたい程、馬上丈夫の心魂を高揚せしめる。

青山の墓地に、明治の小說家紅葉山人が眠つてゐる。

枯木に電燈の花

冬から春、樹に葉なら枯木立の頃に、東京到る處、電車の通る道筋は、宛で枯木に電燈の花が、赤明〳〵一時に咲聯なつた樣で、その美觀は比べるに物は無い。

礫川江戸川の夜景は、石切橋からして、河縁の黒い櫻樹に電燈の花が、飛び〳〵に目が醒めるやう。白鳥橋の邊りで、電花は爛熟煌々と、一緒に咲固まつてゐる。

濠端線でも、何處でも市内、枯木のある場所は、電燈の球花が、美しく夜を裝飾る。星からは眞に別世界だらう。

科學の力は、文明を産み、且つ媒隨して行くのは、之れ神とも謂へる、自然に反抗征服する人間のパワーの表現である。

雲の林に星屑の輝やき、……東京枯木電燈の花を觀ては、現代文明を謳歌せずには居られぬ。

水道橋の畔

水道橋の袂に、一軒詩的な家がある。石灰、セメント、砂利や、多摩川砂を賣

る、屋根看板を上げた、小い低い家だ。

家は殆ど、橋の向ふ蔭に、潜むだ様なのが、濁つた掘割の水邊に在るのと、善く調和して、石灰杯を賣る横看板が、何とも言へぬ趣味がある。

私は此橋を通る折、支那か朝鮮邊にある、小風景の様に聯想をされる。向ふ飯田河岸の方に、石炭問屋から煙のやう白うたつ。

時に橋の下、堀割の泥中に脚を沒し、笊で泥土をシャクッてる、汚穢い男を見る。偶には簪や指環や、金物の類が入る奇運があるさうな。——深い泥土のやうな世間には、迚も光つた美しい心が覓められぬ。

スグ傍に、礫川砲兵工廠の高い大きな煙突が、黑煙を熾盛んに蒼空に吐いて立つ。

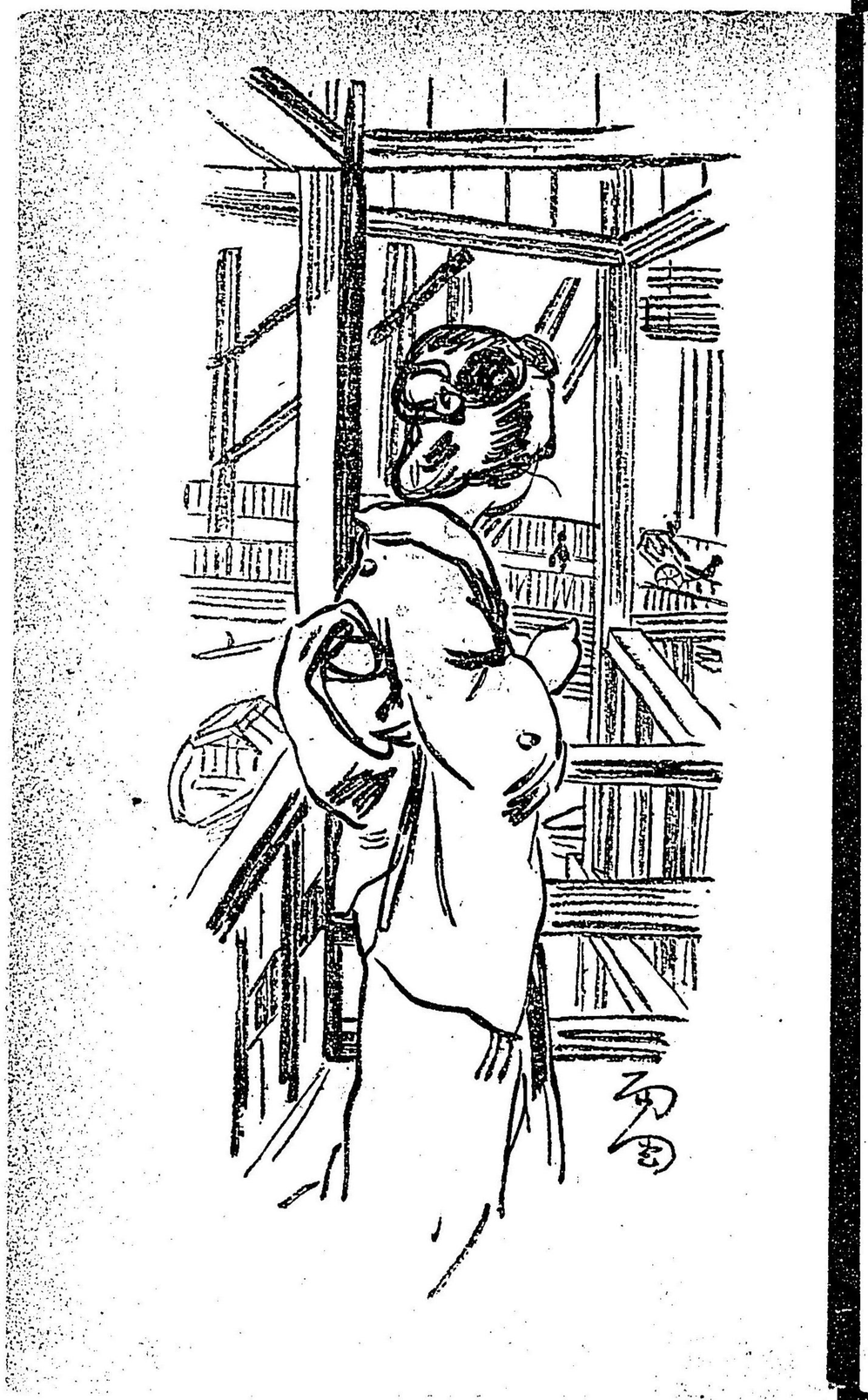
豪放な牛込見附

見附といふ名は、御濠端と、どうしても昔の江戸時代から、殘つた匂ひ、床かしい稱號で有る。見附の中で、牛込見附は、何となく濠の工合から、神樂阪を控へて、市ケ谷、飯田町へ掛け、古い松の樹が、土手の青草からぬつと突出てゐる、此の邊りの風物は、男性的の放膽な趣が、誠に氣に入つてゐる。

甲武線、磨いたやうな色塗りの電車が、躑躅の花の頃は殊に好い。此線は山の手のマーガレットの女學生、高襟男が朝夕姿を見せる。濠の前の線路の電車とは、客種が異ふ樣なのも一奇である。斯う考へると、流石東京は大都會だ。

停車場へ入口、櫻の植込がある。汽車發車の時間表の白ペンキ塗柱、花、紅葉、狩獵といつも茲に掲示の札が出る。角の自働電話と、中々詩趣がある。

上の道路は少し高く、春より夏へは柳が芽を吹いて、綠の糸の風がそよ〳〵と、客待する車夫の幌を匂はす。櫻をながめ、柳を嗅いで往來すると、見附の石垣と濠の水と一緒に、昔の江戸時代といふ感じが、胸に充實して來て、懐かしい



ローマンチックの時代に、多感な者は引返される樣に思ふ。

また見附といふと、警固の武士は素より、駕籠乘物、大鳥毛の大名の行列杯も、髣髴として眼前に繪のやうに浮いて來る。昔の德川時代には、那の石一個でも、素町人よりも、威光を放つたと考へると、今更憎惡の念が起る。

牛込の橋、飯田町の方下には、石や材木煉瓦を積むだ荷船が、淺い泥水に腹を浸けて居る。小石がゴロ〳〵ザアーと音がして、傾斜した廣板の下から投落されてゐる。何かの工事用だらうが、白い礫の澗躍して亦盛むなりだ。

見附を曲つて、土堤に登り、市ケ谷の方を見渡すと、眺望、洋館の白いのが、木立の間に表はれて、浮く千切れ雲は、全く現實と異つた考へを抱かせる。

私は土手の青草に佇むで、西の方眞圓い燒ける夕陽を拜した時に、先刻の人間の世と大々的駈離れた、雲のかたなの天國を思ふた。

姿の柳橋

柳橋の名が、東京式で、華奢なよりも、何となく明るくて、藝者の巣としては、場所が眞正に佳い。隅田河も顔を見せてゐる。

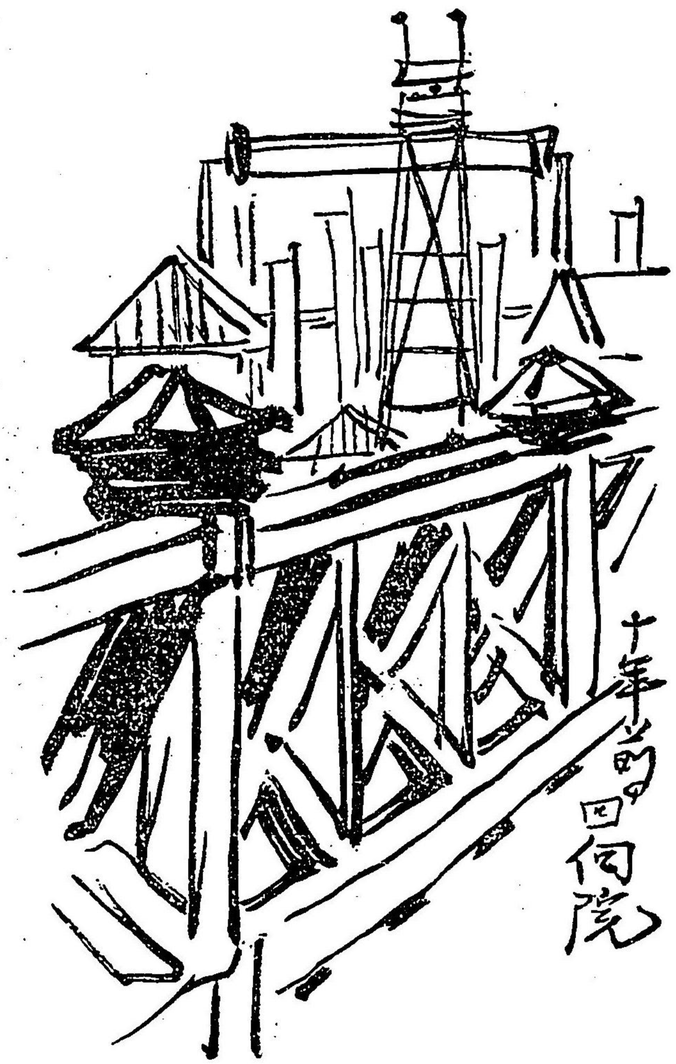
淺草橋も近い、此のドンヨリした水も、濃い惡どい脂粉に、因緣もあつて背景的だ。

以前深川藝者の、意地と張は知らぬが、目下東京では、新橋よりか、柳橋が容色は扨措き、藝の腕と粋とに於て、確に東京第一位である。

新橋といふと、汽車の煤煙とお髭臭いが、柳橋は、隅田の潮氣と柳の匂がする。

漢詩的ではあるが、此處の景色が好い、支那蘇小が家を思出させる。

烏羽玉の、多い黑髪の兩方に筋立櫛を挿むで、艶の毛を膨らませ、阿嬌が湯歸りの姿は格別、眞に意氣で仇ッぽい——頸筋に白粉が油のやうに。



大阪の新町、西京の祇園先斗町。楊柳の數は少くとも、東京柳橋の方が藝者として優つて居る、柳橋にやなぎの様なたよやかな姿の女が……。

奥の礫川の鷺

礫川、林町原町附近は、五位鷺、白鷺の名所といつて宜い。植物園が近いからだ。

ガア々々と啼いて、少々不風流な聲だが、月夜、霜夜抔には、殊に寂しい林町の、宿の窓で此啼聲を聽くと、中々惡い所ぢやない。秋の宵更けて、空に淋しい魄の叫び、春の夜に白鷺を、私は妖精のさ迷ふのかと視たことも有る。

嘴の長い、灰色の五位鷺は、巣鳴の伊達家の松林に、澤山棲つて居る。夏も秋も何羽も、空を輕くオドケたやうに、植物園の杜へ通ひ飛ふ。白鷺も獨り高く、孤雲を侶と舞ふ。

四五年前の田圃が、今は家屋と變つた、西原町 林町、之から未だ〳〵西北に家が、マッチ箱の如建增されるだらう。

礫川、此の附近の空氣も替ると共、蒼鷺、白鷺も、漸々巢を更へて、終ひに影は消えはすまいか、愁人は之を雁と聞くもよい、愛すべき自然の子よ。人間は惡くなつても、鳥は何時までも造化の儘だ。

五位鷺は小石川の名物だ、白鷺は林町の空に淸高な君子である。

両國橋と國技館

両國は、花火と、相撲と、元祿の義士の勢揃ひを聯想する。

本所、両國橋といふと、舊幕時代は、江戸中の人氣と威勢が、あの橋の上に凝集つてゐた樣だ。瞻ッ玉の江戸ッ子は、當時欄干の上で逆立の藝當を行り、隅田の流へ淘然と突落されても、平氣の知らぬ振で泳いだやう。ドウも左樣思はれて

ならぬ。

江戸の名物の花火は、兩國橋の魂で、江戸ッ子の魂を象徴した物だ。金費ひの荒かつたも恰ど煙火的であつた。

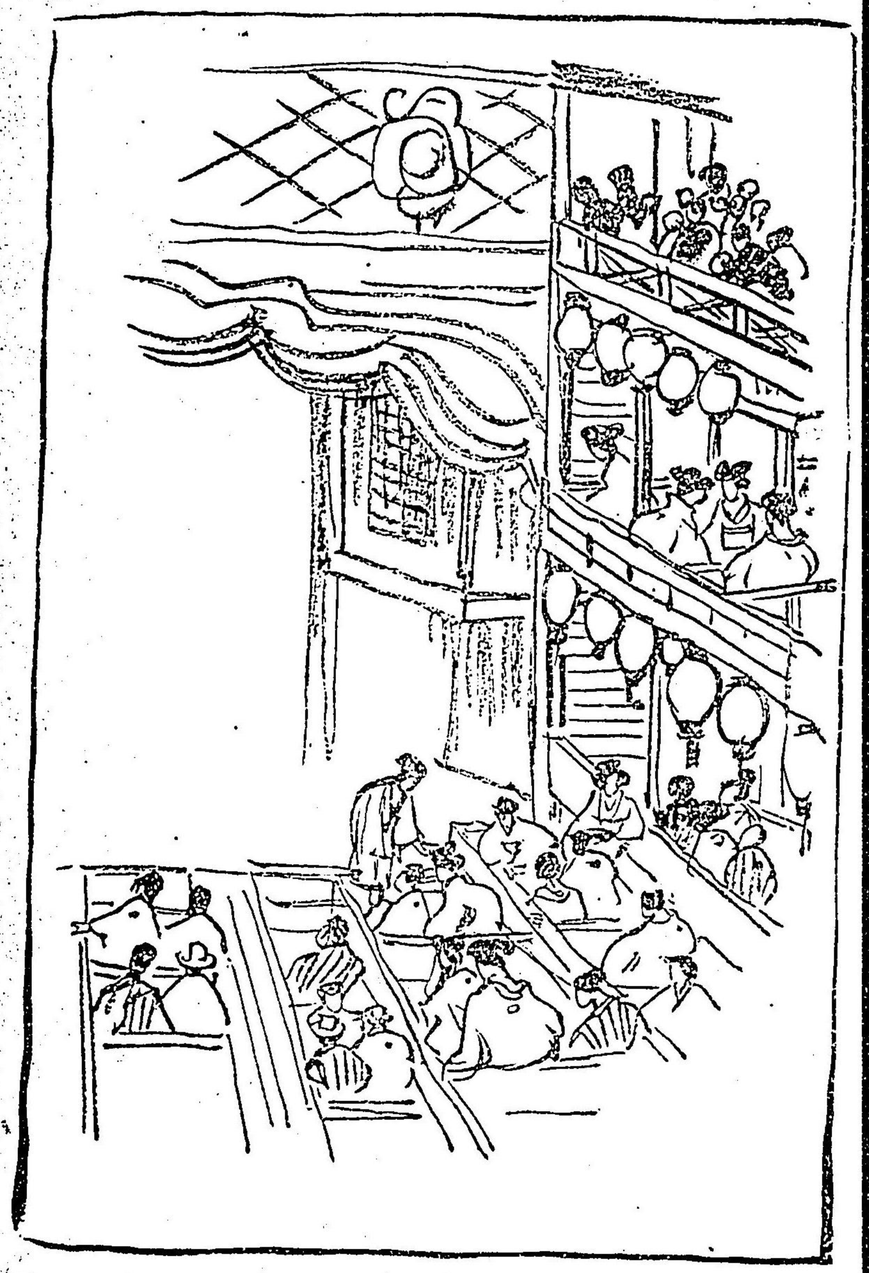
隅田河も、兩國橋の上から眺めた水が、一番に流れの具合と、色の淺濁りと、見ても飽かぬ心地がする。之は尤も人の神經の故だが、日本橋濱町と、本所の兩區に架る橋で、自然背景、前面が宜いから、隨つて兩國橋から瞰下した、隅田の水も此處が第一等となる譯である。

橋の手前の濱町には、白粉燒けのした艶な女、川波には白い鷗が浮く。

隅田の流を寒中水泳する人がある、勇壯なことだ。

兩國橋を向ふに渡ると、古い猪を喰はせる家が在る、時として冬は鹿や猿を表に吊してある、今歳は亥歳だから、兩國の此家は當るだらう。

兩國といふと、回向院の相撲が附物だ。角力も國技館と爲つて、建物は洋式の



堂々たるものだが、其生命たる眞率放膽の角力道は、追々錆びれたのは遺憾である。金錢上の利益問題に苦勞する樣では、矢張り以前の、相撲小屋で櫓太鼓の時の方が、單純淡泊で宜しかつた。

ペンキ塗の國技館に成つて、大髻裸體が土俵に搏闘すべきが、藝人的に且つ八百長等行はれるは殘念だ。廣濶い鐵骨の建物は男性的で結構だが。

小利巧に智に囚はるゝ現代に、相撲丈は赤裸々に、天眞の儘で有てほしい。

本所兩國橋の袂、一月と五月の空に、蓆掛の小屋、雲も無い青天井高い櫓太鼓が河風に響いた、其の昔が懷かしいのである。

東京の芝居

東京の芝居は、團十郎沒して、梨園は、彼に代る腹藝の名優は出ない、骨髓まで凝性の名人肌な俳優は見ぬ。此折の空氣と今とを比べば、合點ができる。然し

新派は左して變りはない。

歌舞伎、明治、新富、東京及本郷座は、東京の劇場の大なるものだ。上方の樣に、一緒に集並せず、市の飛々に在る所が、廣い東京だからと云つても、常は娯樂場とも受取れず、氣を負ふ所が面白い。

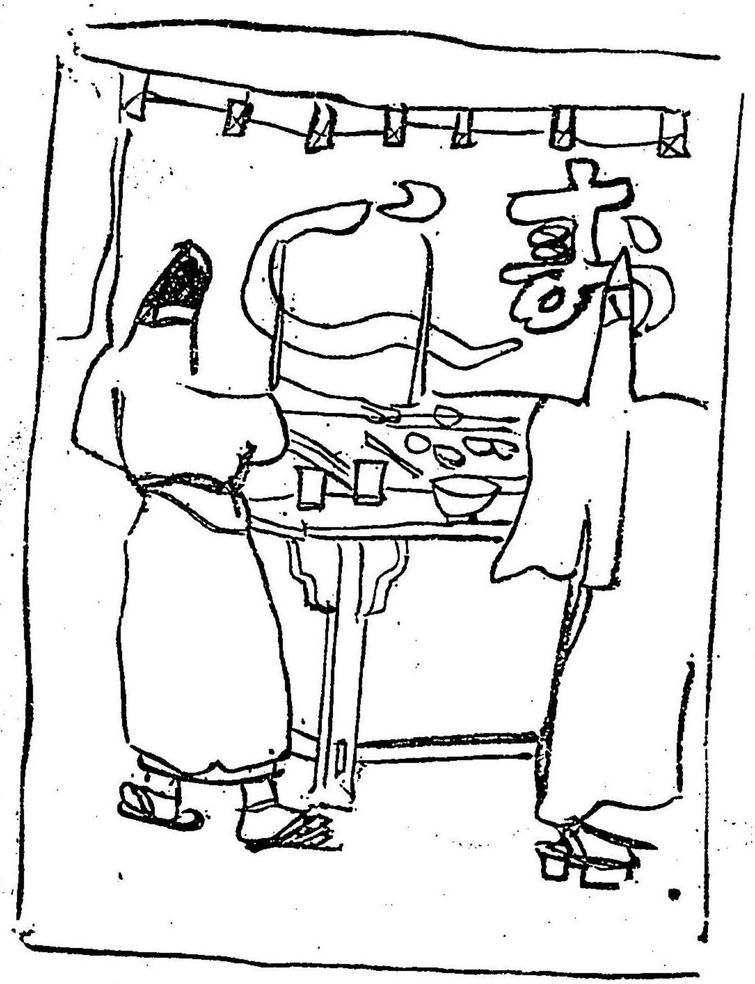
その看板も、上方と違つて、以前からの江戸式、鳥居式で、荒事抔には持つて來いだ。京阪の樣な、説明的な巧緻でない、此のこゝろ持もい、。

此節當地に、四疊半的の哥澤が流行るが、芝居は大劇場風に趣くのは結構だ。

東京各劇場内外の空氣は、日常生活と全く駈離れた、藝術的情調が溢漂ふてゐる。

屋臺店の灯

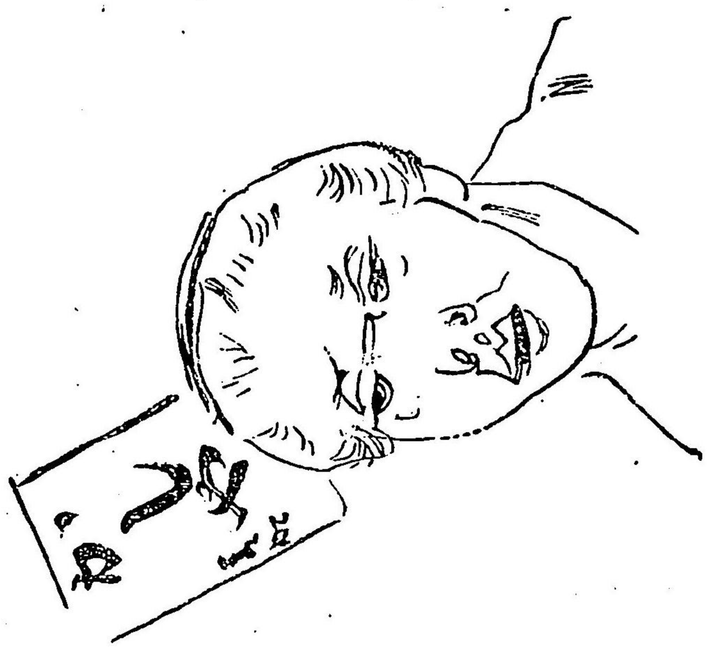
東京の屋臺店は名物だ。東京人は見外坊であるが、其一面、大に洒落な、拘は



閲

欠

MISSING



元氣旺盛な新綠の候、東京家の內、屋根の上で、此の美的な興趣が發揮されるのだ。

右の二つは、男子の喜ぶこと、亦江戸ッ兒の矜誇とする所だらう。

郊外の新築

東京の町端れや、市外に家屋が建殖えるのは、驚くほど多く、そして早迅い。

一日散歩でも爲る、材木が組まれてると思ふて、後で復通つて見た時、モー新家が建つてゐて、魂消げることも有る。

狹少の地面、土臺石の上に、材木と屋根の下も出來、かう成れば、恰ど瞬く間に、壁も何もスグに、家一軒と化はる。

詩人ハーンが、我國の新家の建つ早さに、宛で神秘的だと、駭いて記いてゐるが、之は誇張でもない、全く左樣な物だ。

小さな貸家、九尺二間位は、大工の烏渡の手間で出來て仕舞ふ。あの骨の如な細い柱は、忽ちに組めるのだ。

東京市が發展して、都會の尾に、之れからマッチ箱の樣な、貸家が建增される事だらう。

大きめの建掛の家、郊外、大工職人が休息の煙草の烟、……向ふに小供等がドンドの火を焚いて居るのは、中々詩的な味なものである。

日比谷公園

新しい東京の、新しい趣味を、常に集注めて居るのは、日比谷公園である。

此の鐵柵は、綠樹とで取圍むだ四角い、廣い平面的の公園に、現代文明人の新好尙が、最も華やかに、明らかに、具備し、開展されて在る。

運動場、音樂堂、噴水、共同ベンチ。とりわけ、各種珍奇な西洋の草花が、魔

界がこゝに開けた樣に、人目を狂喜せしめる。日本趣味の植込も腕を盡して心地がよい、迂廻した道が堅く固つて、ステッキを鳴らしてみたく成る。

珈琲一杯でも、日比谷の味が有る。この公園に入ると、誰でも大東京の、新空氣中の人といふ感じが爲る。

朝日夕日、赤い雲、白い雲、……諸官省の宏大な建築物が、四方に在る丈け、華麗な壯觀は、正に帝都第一である。

大劇場帝國座が、近くに出來る。新なる脚本と、新しい頭腦と腕との俳優に依り、國民藝術の花が開くか、待遠しく懷はれる。

赤と綠との小旗、電車は陽氣に忙しく駛る。砥の如な大道を燕が翔ける、自働車、馬車が勇ましい音を立てゝ通る。

濠端の柳が、天下の春を燃えて見せてゐる。

日比谷公園の柵外は、空氣が日夜活きて波動してゐる。

貴衆議院の高い窓が、火の辨舌のやうに輝いて望まれる。

目白臺

目白はスグ僧園を想はせたが、今は女子大學の目白と爲つた。

目白臺は、抹香臭かつたは以前の事、屋根の尖つた洋館が、寂しかつた處にも建ち、新しい空氣が、樹木の吐く息と、一緒に高臺の上に漂つてゐる。

女子大學へ行く道は、音羽から坂を登つて、未だ田舍臭い空氣は殘つては居るが、唯一の女子大學の、クラシカルだが建物在るが爲に、附近の百姓家まで明るくなつた。

早稲田から目白臺は、綠の大刷毛で塗延した續く森林、その中に畫の如な洋館舊いパノラマ式で、其上にたなびく靄と霧と煙、ローマンチックの白雲が靑空に夢を描がく。

目白は、落葉と鳥との雜司ヶ谷に隣る。位地として學校は、最もおもしろい處に在る。

女子大學は、新しい女流教育の全國の中的である。頭髪と服裝と袴、とその何の關する所だらうぞ。

道玄坂の陽窟

青山七丁目を、澁谷の踏切まで、田舍と新開町に、電車が東京の空氣を入れた樣なのが、澁谷の道玄阪である。

飛んだり、續ひたり、二階建の料理屋、藝者屋も在る。平常、薄暗い、重う沈むだやうな此邊の空氣に、一種の荒い、耽溺的の情調が漂ふ。田舍臭ひ三味線の音も夜遲くまで、障子を洩れて來る。

牛肉店、一品料理でも、家が何となく陰暗に、女中まで廢頽的の顏色をして居

る。併し澁谷の、此處は熾な強い生命、歡樂の中心かも知れぬ。澁谷も漸次に、是から都會化するだらう。

夏秋に家の垣根に、コスモスの星と咲いてたが、郊外の澁谷は、此の趣味を以て開けて行けば可い。

道玄阪は、澁谷中の陽盪な、耽溺の夜の場所だ。

道玄とは昔、阪上樹木欝蒼と晝も暗かつた、其折の盜賊の名だと傳へられる。果して眞か奇である。

蛤趣味の深川

蛤蜆によつて、深川を連想すると、深川は東京中で、趣味と氣風の、最も異つた所だらう。

深川には、昔の江戸趣味の、僅か一部が殘つてゐる。

町が何となく古く、濕つて薄鼠色の、海沿の臭ひがする。蛤淺蜊の本場だけで、狹い道は、生の貝類が吐く息か、鼻に柔かに些に腥ぐさい。

堀割つた小い河は、濁り切つてゐる、無論海近いから潮だ。

蛤淺蜊を小丘に店に積むで、貝賣る家がある。奥にスグ河水が見える。

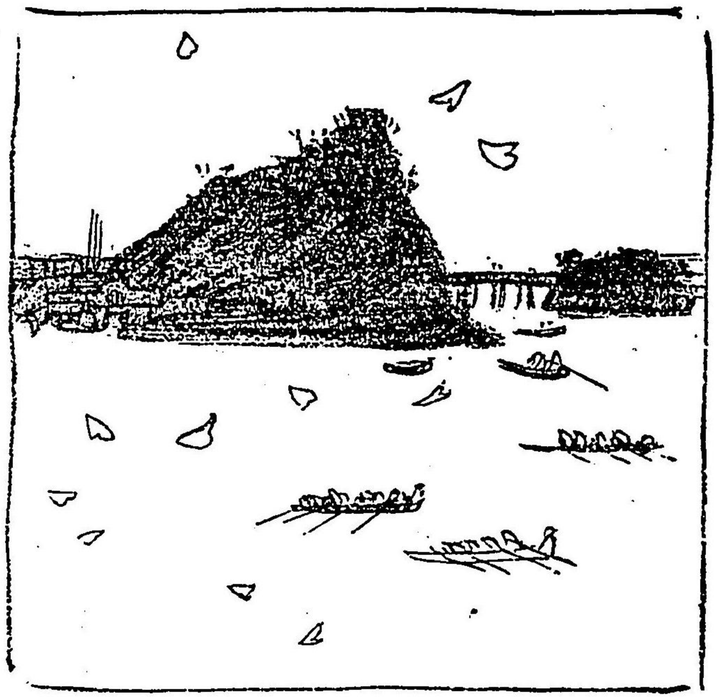
商賣屋でも、上等な場末程だ。小料理屋でも深川丈けあつて、蛤鍋は美味い、

家の建具合が、空氣に調和して、所謂乙な江戸趣味が有る。

名物深川めしは、飯に淺蜊をブチ込むだ物だ。洲崎遊廓は背中合せだ、處は爭はれぬ、角刈の鰡背の兄哥に會つた。

葦と月で唄はれた、越中島は昔の面影もなく、物質に破壞されて、床かしい江戸趣味は水に沈み滅むだ。

傳通院と瞑想



礫川傳通院は、有名な古刹だ。二三年前、本堂が燒けて惜しいことをした。境内、御開帳の折は、茶店が出て賑はふ。紅の巨提燈が門へ吊される。何本かの櫻が春は咲く、毎も鳩と小供とが遊ぶ。佛の足形のある、滑つこい苔い大石が据はる。

横手に、蔓草の生繁つた、卵塔場や、墓が澤山在る。小い板圍に、心中比翼塚があつて、線香の薫り煙が絶えない。

奥に、諸大名の緣故に掛るのだらう、種々の奇體な形狀をした、定紋附いた、偉巨な墓が幾つも立つ、臺石許りで、頭が草地に轉つて居るもある。物質果して何ぞ、秋はその石蔭に虫が鳴く。

本堂の裏手は、草の丘だ。向ふ、礫川指ケ谷、白山一面が、木立とクッキリと見える。紙鳶が高く雲まで揚つてゐる。

墓の捨石に、腰打かけて、物を熟と瞑想するには、寔に草が靜かで善い。

礫川傳通院の内外は、東京稀覯の、古色の剝げぬ懐かしみがある。

春の隅田川

吾妻橋を渡つても、昔から名代の竹屋の渡を舟でも、隅田堤に着く。以前は百本杭と、竹屋の渡は、入水心中の本場だつたげなが、今はそんな事は無い。言問團子、都鳥は、變らず隅田の水に緑がある。花の頃は、墨堤幾里を香ふ雲で埋める。櫻も人も水も、一刻千金の春に酔つて了ふ。

一錢蒸汽、短艇、和船、腹を温かい春水に浸けて、游泳する。上げた帆も、春風に孕婦の如な心になる。

白髭神社、梅若塚、詩的の名所もある。詩は春に一ばん其の光を發揮つ。

酔漢の頬のやうな、春の赤い日が暮れて、墨堤の花下、よごれた紅粉と、爛饐

した如な酒の臭ひと、生温かい風が水に溺れ流れて……。

待乳山の森に、妖女の細い目のやうな灯が見える。

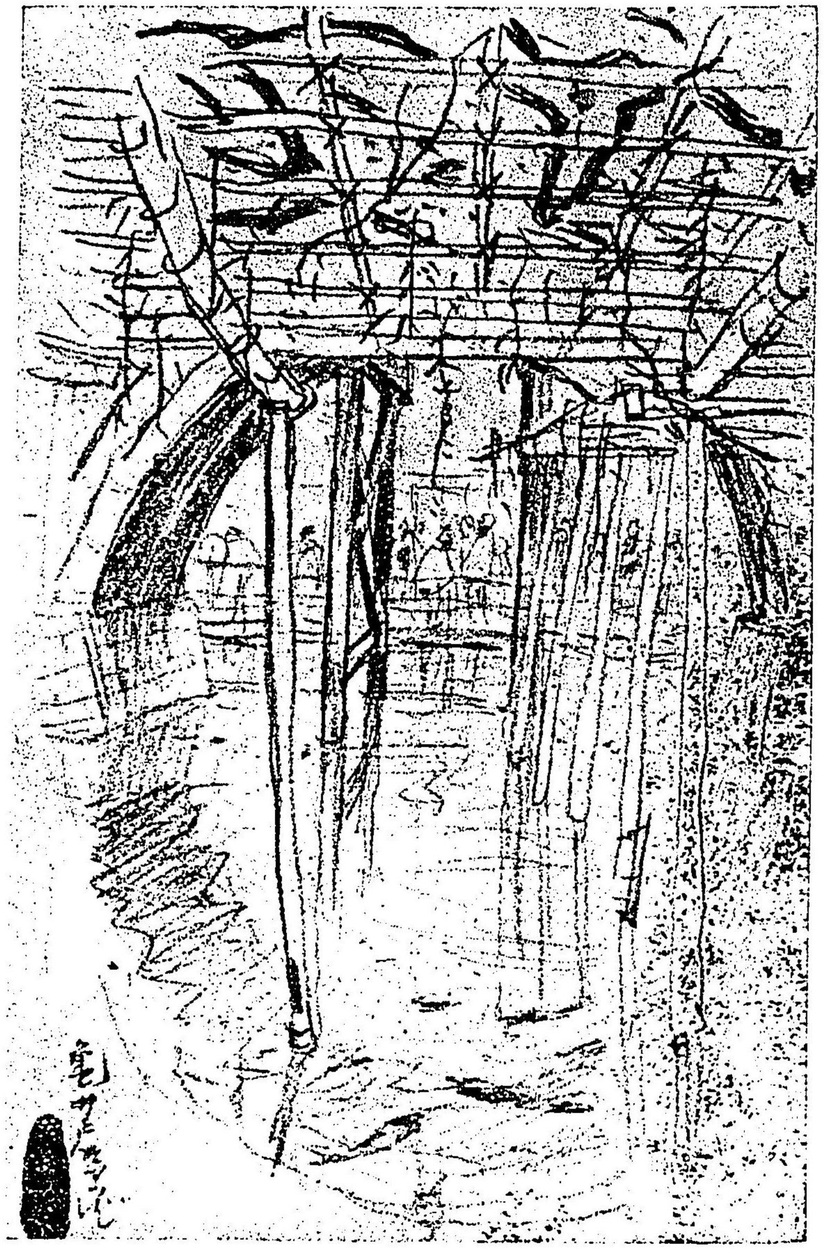
母子地藏

母子地藏は、芝白金のお寺に在る。哀れで名高い、二本榎殺しの、母小供と女中の地藏様だ。

赤い弘法大師の長提燈を吊した、黒塀の門の裏、一間位な狹い園ゐに、母親と小供と、都合五體の可愛い〻、石地藏が立つて居る。

銘々の地藏の首に、小さな涎掛をして、線香が朝夕、縷々と細う、物悲しげに薫つて白う立昇る。

南無阿彌陀佛、誰れの參詣人手向の仕業か、板圍の內に、紅の涎掛、犬張子や、繪馬やが釘に懸聯ねて、見る者をして、同情の涙を絞らしめる。



其の傍に、有志の寄附金標が建てゝ在る。

濶達な、勇みの江戸ッ兒の半面は、斯うした優しい美な所に表はれる。元來涙脆いのは、強い江戸ッ兒の持前である。

嗚呼、哀れな母子地藏！我が日本文學のローマンチック、の優美な特長も、蓋しこういふ點にある。

大久保にも、同じ悲慘な母子地藏が出來たさうな。

亀井戸の昨今

龜井戸は、臥龍梅を以て名高いが、今は然うでも無いやうだ。裏門の御神燈で噂が高い。

本所、龜井戸に行く迄で、太平町通りの空氣は、朱で書いた牛飯屋や、墓場で不愉快だが、龜井戸近くなつて、濁川に浮く舟や、小洒落れた割烹店等、流石情

景の面白い所がある。

古い鶴井戸の境内、雅な中に神々しい。爰で春は鶯を啼かしたい心地が爲る。

赤毛布を敷いた、茶店の床几、名物葛餅を賣る。白い葛餅はちよいと味な物だ。

御手洗に、紺や淺黄の奉納手拭が、春風にヒラ〳〵動く。鮮かな新しい色が、頗る感じが佳い。

本社の周圍に、藝人俳人の建石が多い、場所が振つてる。

中江兆民翁の、巨大な自然石の碑が立つ。東洋のルーソーは、永久宜い土地に眠つて居る。

裏門の藝妓屋で、意氣な三味線の御浚へが始まつてゐる。

三越の使者

白い三筋の線の付いた、圓い小形の帽子を冠り、白脚の自轉車に輕い體を乗せて、飄然と風を切つて行く、洋服のボーイは、之れは日本橋三越の使ひである。

自分は初め、ふと町中で出會つた折、郵便局としては妙と思つたが、三越の裏門で、此の異裝のボーイが三々伍々、出入りするのを視、小供大にやる哩と頷くと共、可憐な活潑な洋服姿だと懷つた。

服は黑地に、襟に、手首にも、青く羅紗で緣を取つて、胸に銀色の光る金の徽章を附けて、露西亞風とでも謂はうか、少年の姿は凜々しく、勇ましい。若々しい血潮が、健全な手と足に漲り巡つてる樣だ。

少年は、音も立てず迅く、自轉車に跨つて、飄然として走る敏活さ！自身の尻の處には、風呂敷包が括つて乘つてゐる。

三越の使ひのボーイ、如何にも文明式だ。——大都會を自轉車で縱横に宙と駈廻り、こんな勞働は小鳥の樣太だ結搆なことだ。私は田舍で土掘する百姓の子を

想つた。

義太夫と浪花節

義太夫の熱も、近來は落語も何の寄席も、甚く淋しいやうだ。

女淨瑠璃といふと、瑠璃の字が良いが、女義太夫の名は以前は墮落を意味したが、今は學生も大騷ぎを行る程の馬鹿者も無い。

容色と藝道と、一時大流行したとき位、目下では兩方共に見られない。何にしても女義太夫は凋落の形である。

女義太夫は、青年相手であるが、今日の書生や若い者は淨瑠璃より、感情の緊張切迫した、現代に觸れた薩摩琵琶の類に走る。併し女義太夫に、非常な美貌と音とが有るは格別だ。

今日と雖も、肩衣白地の袴に、ハイカラ廂髪の美しい娘義太夫もある。聲で聽

かせる老巧なる藝人も數へられる。

淺草雷門の傍に、東橋亭といふ寄席、大入の紅提灯や看板や、軒は四季に賑かだ。畳席もあり、デン〳〵の絃の音は、隅田の流と絶え間もない、繪看板も、之では中の藝人は嘸艶と想はれる。第一隅田に近い場所が佳い。

義太夫は女の獨立して、美の生活が送れる業だ。

浪花節は、之は雲右衞門を絶頂として、今日では客足が餘程減じた。一時は東京中の色物の寄席が、大恐慌を來した位であつた。

關東關西の二派あるが、關東節の方が聲は低いが、聲調が沈痛悲壯で、三味線も冴えて居る、そして品も持つてゐる。講談より節と糸が加はる丈け、流行る。

義士傳抔三席、立續けに講む眞打もある。新派の小說新聞物等は向かぬ、矢張り武士道とか俠客物が適する。

追々客種も上等になつたが、高座の藝人に紋附袴の堂々たるものだ。

闇の夜に、身を切られる如な新内の流しも可いが、瓦に霜の光り更けて、職人かゝ甚い美音で、浪花節を轉がして通るのは、男らしい悲壯で腸が斷たれる。

山の手は兎に角、下町趣味として、東京ッ子に、永久に、浪花節は人氣を失はぬだらう。

業平町と萬年町

業平町といつても、昔業平のやうな美男子が居るのでも無い、本所の木賃宿のある陋巷である。

一體本所は、空氣の冴えない、重く底沈むだ樣な處だ。その中で業平町は、狹い陰暗な木賃宿の通りだ。屋號の書いた、白い門行燈が出てゐる。

浮世の敗殘者が、一泊六七錢で雨露を凌ぐ。土方、立ン坊、輕子、辻藝人や門

附抔、夫婦者も宿つて居る。業平町には、白い首の夜鷹姫が多いさうだ。

萬年町は、下谷名代の貧民窟だ。薄運な人間の生命が、萬年延びることも有るまい。

曲折した、ぐる〳〵廻る細小路、鼻垂らしの小供が、縄と棒とを以て遊んで居る。

南京鼠の箱の如な薄臭い家に、車夫、傭人夫、下駄歯入、露店商人等が住む。

結髪のこわれた女房が、狼の如わめいて居る。

町内、小い居酒屋の酒は酸ぱく、肴屋の魚は色褪めて腐つて居まいか。此處の空氣は呼吸するに堪へぬ。

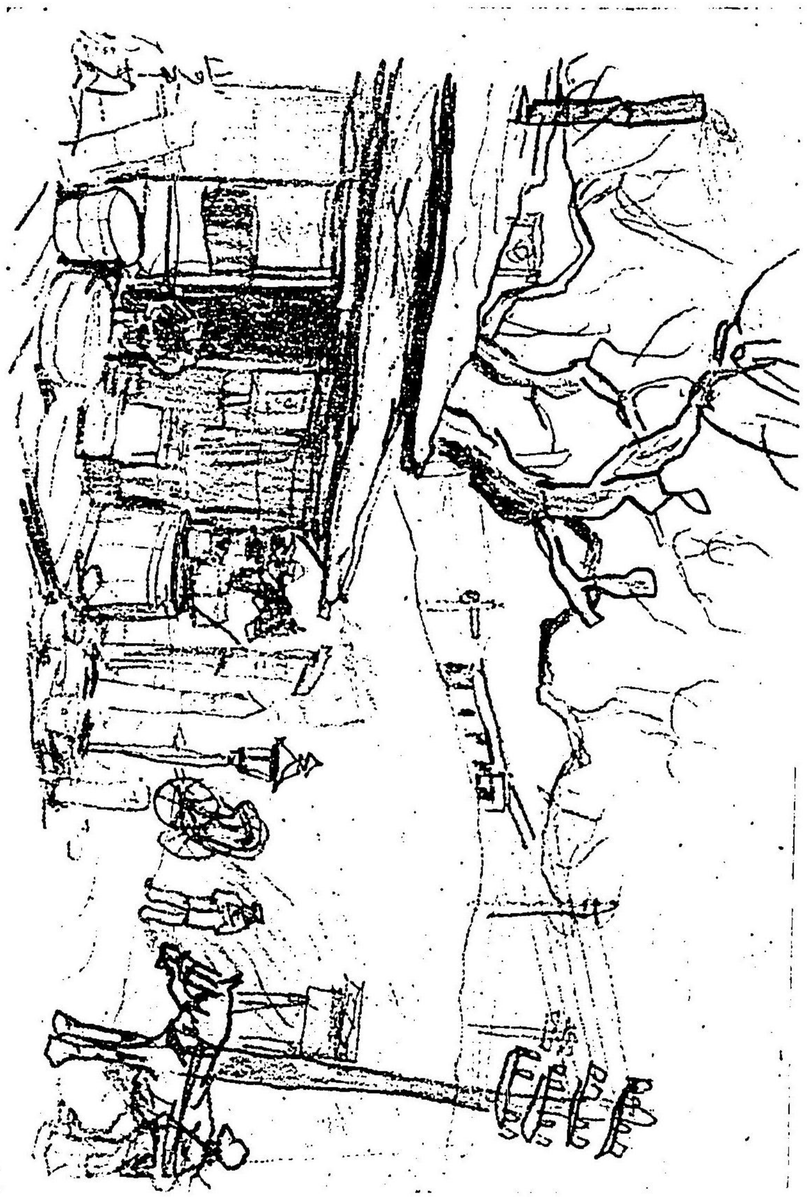
上野の杜を出た鴉が、いやな聲に啼いて低い屋根の上を過ぎた。

紙屑拾と魚腸拾

東京の街に、下手な漫畫か、影の如に歩くのは、紙屑拾と魚腸拾とである。油と煤で煮染めた様な着物、ボロ〳〵の股引か洋袴、穴のある肩へ大きな竹籠を背負つて、紙屑拾は、長い竹挾みを右手に、左には更に小い目籠を持つ。朝暮、首を下げ弓曲りの姿に、到る處歩き廻る。例の長い竹挾みで、屑でも何でも、チョイと拾ふて、チョイと背の籠と、手籠へ投分ける素早さ。鳶が鼠を攫ふよりか巧妙だ。

眞黒いお釜帽深く、少年で、破れ長靴抔を穿くのは、宛で西洋の乞兒だ。天路歷程を讀むと斯んなのに出會ふ、銀座邊を晝日中、平々然と歩いて行く。

魚腸拾は、一層下等だ。日本橋河岸には、眼を光らせて、小狐の樣に魚腸を袞る。時に芥箱から腐れか、つたを拾上る。彼れの鼻の官覺は全く麻痺してゐる。渠等は、恥もなく都會が零した汚穢い、腐敗れた物を拾ふ、憫れな双生兒である。



紙漉く音羽の町

道幅は狹くはないが、宛で田舍の賑かな街のやうだ。表障子の飲食店、薄汚い商店、小石川區の場末である。

音羽の特長は、紙漉業の盛んなことだ。古朽ちた樣な家の裏庭に、黑い板を建並べて、男女の職人が、紙を製造して居る、手觸りも嫌な色の淺草紙もできる。

音羽の薄暗いやうな町で、麁末な紙の製造、恰ど濕暗の町から、浮かぬ心が生れる樣だが、天氣の晴れた日には、春秋麗かな光線が、製紙を貼つた建板に射當つて、一種の詩趣が有る。

鼠坂は、鼠の長い怪しい尾みたいだ。此邊の家は、廢頽的氣分が充ちてゐる。

夕景に、服裝のわるい女房達が集まる、小魚店の裏は、貧民の棲む長屋續きだ。

音羽の突當りは、有名な護國寺だ。赤塗りの巨な門に、白い豆のやうな鳩、境内はヒッソリとして、空氣が飽までも清澄である。

江戸川のスケッチ

花に雪に、礫川の江戸川は、都會の一區域の名所だ。關口のドンドから、瀧と落ちて流れて來る水は、常に薄濁りを爲て、兩側の低い堤畔に、詩味を注いて行く。空の雲が柔かに靜かに、雀も燕も影を蘸す。

江戸川は、東京市の北に流れる、最も懷かしい、畫に詩にスケッチに富むだ小河だ。自然の優しい、そして男らしい名を求めるならば、私は直ぐに、礫川の江戸河だと答へる。

石切橋から白鳥橋まで、小い狹い木橋は三ッ四ッだが、孰れも川に親みを以て、花にも、雪にも、朝晩南北の人を渡す。

此河は秋の雨多い頃に、時折溢れるが、それで岸より減多に水が上つたことが無い。どこまでも江戸ッ子の、優しい一面を現はして居る。北の岸の方に飲物店と商家の、川の名にちなむだのが在る。小石川に櫻の江戸河がなくば、殺風景で土地が唄にも上らぬだらう。礫川には是非詩的歌謠が殘らねばならぬ。

寒中の冬でも、小い貸舟が、河流に繩に繫いで五六艘、夢のやうに浮いてゐる。永く人の乘棄てた舟の中に、忘却と廢滅とが殘る。然しガランとした此舟にも、花の春、青葉の節に歸ると、水上の小舟も復活して、棹と烈しき力とに活動し始める。恰も失望した人間の胸中に、勃々たる英氣の閃き來ると同じやう。支那人も日本の少年と共に、江戸川の夏に遊ぶ、故國水天上より來る黃河、汪々限りない揚子江の遊びも、人無心に遊戯せば、熱狂終に變りはない。之と逆まに自分は、音に聞く壯大なる揚子江上に、一度は生命懸けの遊びが行つて見たい。

江戸川は、花には水白く、青葉には流が悉く綠に變る。如何しても江戸ッ兒

の、名に縁りの有る、いさぎよい流れである。

電車が南の岸を通る、赤の夜の電火が花のやうに美くしい。

水の曲り角で小鮒が釣れる、呑氣な釣客も在る。

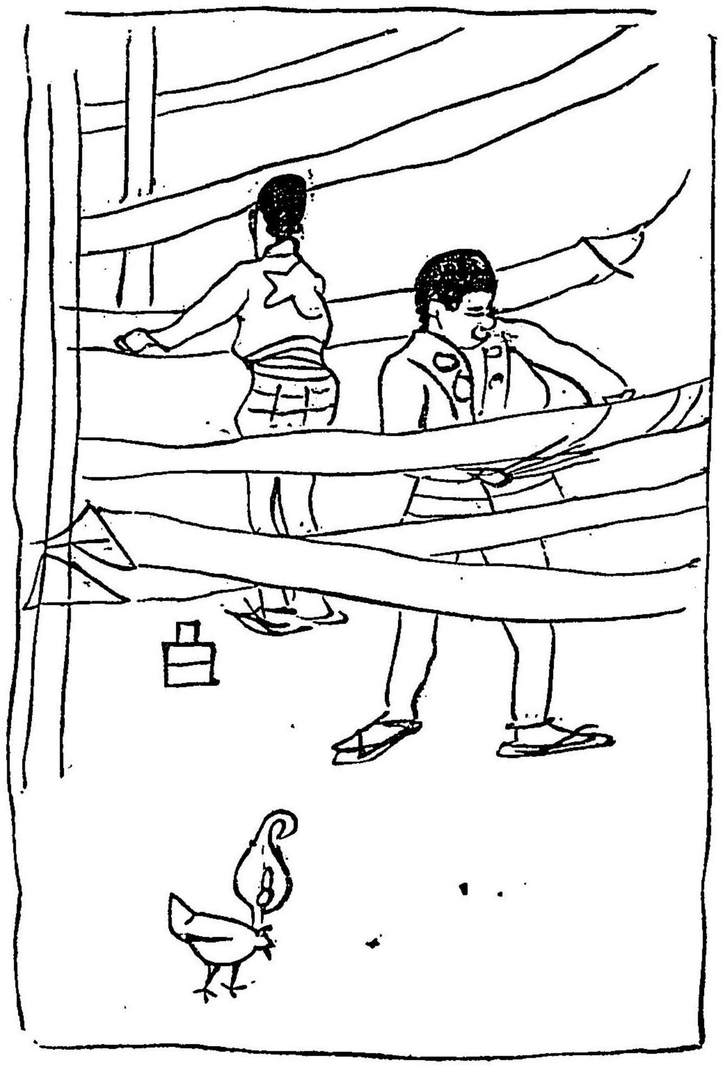
岸邊に合歡木の低い木が生へて、夏の夕暮に、私の學生時代にはやさしい螢の火が光つたが、今はもう見られない。

唐辛と納豆

七味唐辛は、納豆と共に、東京ッ子の好物の一つだ。

緑日に行くと、皺の婆樣が賣る。赤い粉の唐辛を、山椒、胡椒と、奇麗に臺の上に山盛りに、露店の燈に光らせて有る。そして木で拵へた、小い樽形の容物が可愛い。

赤い蕃椒が、此の二句入の一樽あれば、以て鬼でも泣かし得る。江戸ッ子の嗜



むのは無理でない。

兩國に昔から、名代の唐辛屋が在る。

雪が降つても毎朝、東京では女房小供が、曉から「納豆〳〵」と呼んで賣て歩く。納豆は最も東京人士の、一般に喜ぶ食物だ。

納豆は、大豆の腐つたのと人は言ふが、此種の、奇な變つた味を好くのも、亦江戸的趣味が殘つた所だらう。

唐辛は、強い激しい刺戟を好む東京ッ子に、是非無くてならぬ香料である。

眞赤な唐辛を、太陽の光の如うに、世界に振撒いたら……私は誇大妄想狂のやうだ。

須田町の渦音

電車の四通する十字街は、神田の須田町だ。市中の繁榮と、生活とは茲に塵埃

と、渦巻いてゐる様である。

誰やらが須田町を、都會の親不知といつたが、實にその言葉通りで、田舍出の椋鳥先生抔は、電車の鈴と軋る音と、人間の足音と聲と、風の日などは立揚る濛塵と、まご〳〵すれば迷兒に、生命に掛ることも出來る。

然し、昌盛なる都會の活動は此處に觀よ。各種の人間の通行は、日夜活動寫眞の如く、人車、自動車、自轉車及び荷車が、縱横四方に、機械のやうに走廻つて居る。生活力に競走の熱い油を注いで……。

朝夕刊の新聞賣子も茲が第一だ、鳥渡曲ると連雀町とて、細い空氣の變つた所がある。

有名な萬世橋にも近い——此橋は電車が出來てから、名が水の底へ落ちた、小の物質が大の物質に敗けたのだ。

須田町の夜景廣告電燈は、俗光りだが强く烈しい。

中洲の明暗

蠣殼町から、やさしい女橋を渡ると、そこが中洲だ。こちらから、眞砂座の芝居の立幟が、赤紫と色が美しう眺られる。

建物は小い方だが、此の邊りの空氣が、濃厚で情景が、並び具はつてゐる。土地が洲だと言はれる位だから、近傍の海潮の溫い、しつとりとした氣氣が、輕い霧と煙のやう立罩るのであらう。山の手に住む者には、何とも知れぬ佳い感じがする。

小い楊弓店が、劇場の側にあるきり、別に飲食店も、娯樂物は無くてゐて、其れで空氣が艶に沈むでゐる様であり、中洲はなか〳〵狹いが安くない處だ。

劇場の周圍を歩いて見ると、何の家も、仕舞家風の、閉切つた粹なあやしい二階建だ。

中洲に、さ迷ひ溢漲る、濃厚な耽溺的の空氣は、或は此の家並からの故であらう。

吳服店と刺戟

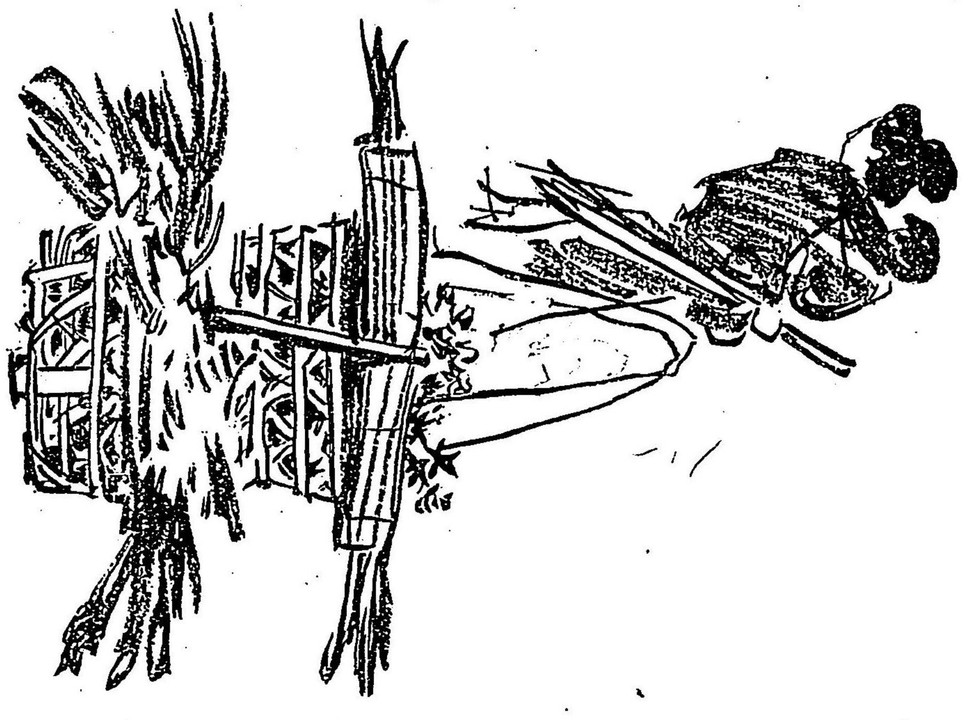
日本橋京橋は素より、東京大通り吳服舗の裝附は、ドコも驚く許り綺麗に成つた。店頭硝子棚の中は、友禪や繻珍の帶や、春の花秋の紅葉と、寔に絢爛の美を極めてゐる。

明透な玻璃の內に、丸髷姿の美しい人形抔飾つて、高貴な品物と共に、通覽人の眼と腦とを强く刺戟する。

限りない欲望、眼ばかり高くなつてゐる現代人は、斯ういふ工合に爲なければ、其の心胸を刺戟能きぬのだらう。世の中には天國極樂でさへ、滿足せない近代人が出て來たから、大分何事も六ケしく成つた。

欠

MISSING



紅葉も佳いが、東京の紅葉は氣候の工合か、早く色が變つて落ちて仕舞ふ。でい秋に花よりも美に、黄金色に誇る樹は公孫樹である。

市内の神社には、この木が尠らず植ゑて在る。松とも調和をする。

公孫樹は、古代的植物で、東洋特産の樹ださうな。

小石川には、有名なお怪銀杏がある。秋の頃は空の雲に映つて、畳間火事の如に黄に燃える。

東京の都會の端々に、堂々と公孫樹が太柱の樣、突立つてゐるのは悦ばしい。

妖艶和洋草花

西洋花が、邦人に愛賞さるゝに連れ、市内にポツ〳〵花賣る家が出來た。大抵は硝子棚が、入口の左右に有つて、其裏に、西洋の色々の草花の小鉢が置並ぶ。ダリヤ、コスモス乃至赤狂ふカンナ等、より知らぬ眼には、皆珍奇な、異變な瓣

と葉との草花が、あやしく通る人の魂をそゝる。

從來の花屋と較たら、此店は紫や紅の花の、氣狂の小い展覽場だ。草花も斯う棚に据ゑてあると、市中の人間に親しむ心地が爲る。加之、鉢も陶器の上品な雅なのを用ひて、文明人に偏ら滿足を與へる仕掛だ。然し事實草花自らにしたら、棚の内は玻璃の美でも露と光との惠みなく、不幸には違はぬ。嗟凡て美はしいものは現代に於て、女の肉も花莖も、犧牲たるは免れぬ。太陽の恩慈兩者の上に饒かに在れ。

尤も草花は、和洋共に賣る。種類を擧げると、……盛花　束花、切花、花輪等。草花屋の夜景は生々と瓦斯に葩の眼が光る、……恰ど夜會での若い女のやうに。

聖なる額縁店

歐洲、洋畫趣味を、代表する市の舗は、小ザッパリした額縁店、寫眞油畫を售る家である。西京大阪にも、此種の店を見るが、未だ東京ほど清新な物尠なく發達してゐぬ。額縁を賣る家は、空氣が寫眞油畫の内容と、情調がしつくり合つて、商賣の如うな、汚れた光の金錢利益を取扱ふ事さへ、此所では奇妙に、神聖な心持を爲せる。額縁の枯木の匂ひは感じが佳い。

聖母マリヤの無垢な肖像、いつの代にか絶えぬ。玉のやうな髪を垂れた、少女が十字架の前に御祈禱する。白い雪の長い翼を背負つた天使、笑むだ小い神樣の小兒。紫の葡萄、紅く染まる林檎の果、……グッセマネや、茫漠たる曠野で耶蘇が惡魔に試らるゝ圖、義の血の緋の衣を纏ふた荊棘の冠の名畫は、東洋の極の一額縁店にも品は切れぬ。

併し、此節では、うれしい現象は、リンコルン、ルーズベルトや、又露のトルストイや、所謂正義の戰士のが、店頭に顯はれてゐる。それかと思ふと、狂熱の美少女の、淨い胸も露はの肖像——燃ゆる黄金の髪は腦の眞中に分れ、寔に圓味

の輝く眸は人を魅する魔力が藏る。之と並むで彼の世界に有名な、ベスビアスの紅い噴火山の小額がある。夫れにまた極端な激浪怒濤の寫眞、アルプス山の大雪嵐の圖等、斯は現實の平凡生活に飽いた、人間の心眼を欣ばせ、激しい刺戟を與へる印象で有らう。今日では名も無い、娯樂的の額縁舗でさへ、此の傾向より逃れない世界思想の渦中に在る。

東京の額縁店は、詩と宗教との高尚な趣味を、僅かながらも代表する。自分は此種の商賣の、滿都の黄塵の中に、日に新緑の如う殖えんこを希望する。人間の心は街頭で、鳥渡した事件にも、詩的になり宗教心を起す。

彼の有名な平民畫伯ミレーの、野に於る祈禱の畫、店頭の此れ一枚でも、都會通行の俗人に、潔い洗禮を受けさす力が籠る。

飛鳥山の春畫

花の飛鳥山は、古木と共に、久しい山だ。花の魄が、春風に游離するのは、東京眞に此丘だけだ。

櫻が咲いたら、風流氣の骨髓迄もある者は、遠くとも此の飛鳥山に集まる。元祿式に、縦し紅白の幔幕を張らなくも、呑氣連は、茶店を借切つて、三味や踊りで、男女が春の永い一日を酒で醉ひつぶす。

田端から、王子に往く道の、黄な菜の花も綺麗だ。飛鳥山の櫻の花と、油畫に塗つたら東洋式の特色だ。

少女の赤い布や、蝶々や、デカダンの温い風が春を領する。

山の上から、スグ王子製紙會社の煙突が雲を吐く、見ても花の障りにはならぬ。

數町先は菜の花が黄に燃える。

紅葉の瀧の川は隣りだ、流れは春の花葩を漂はす。

我が藝術國の住民は、花に一日を打込む位な餘裕は有つてゐる。

三崎町の支那人

神田の小區域だが、三崎町は、様々の家と空氣が、一種の異つた町を拵へて居る。

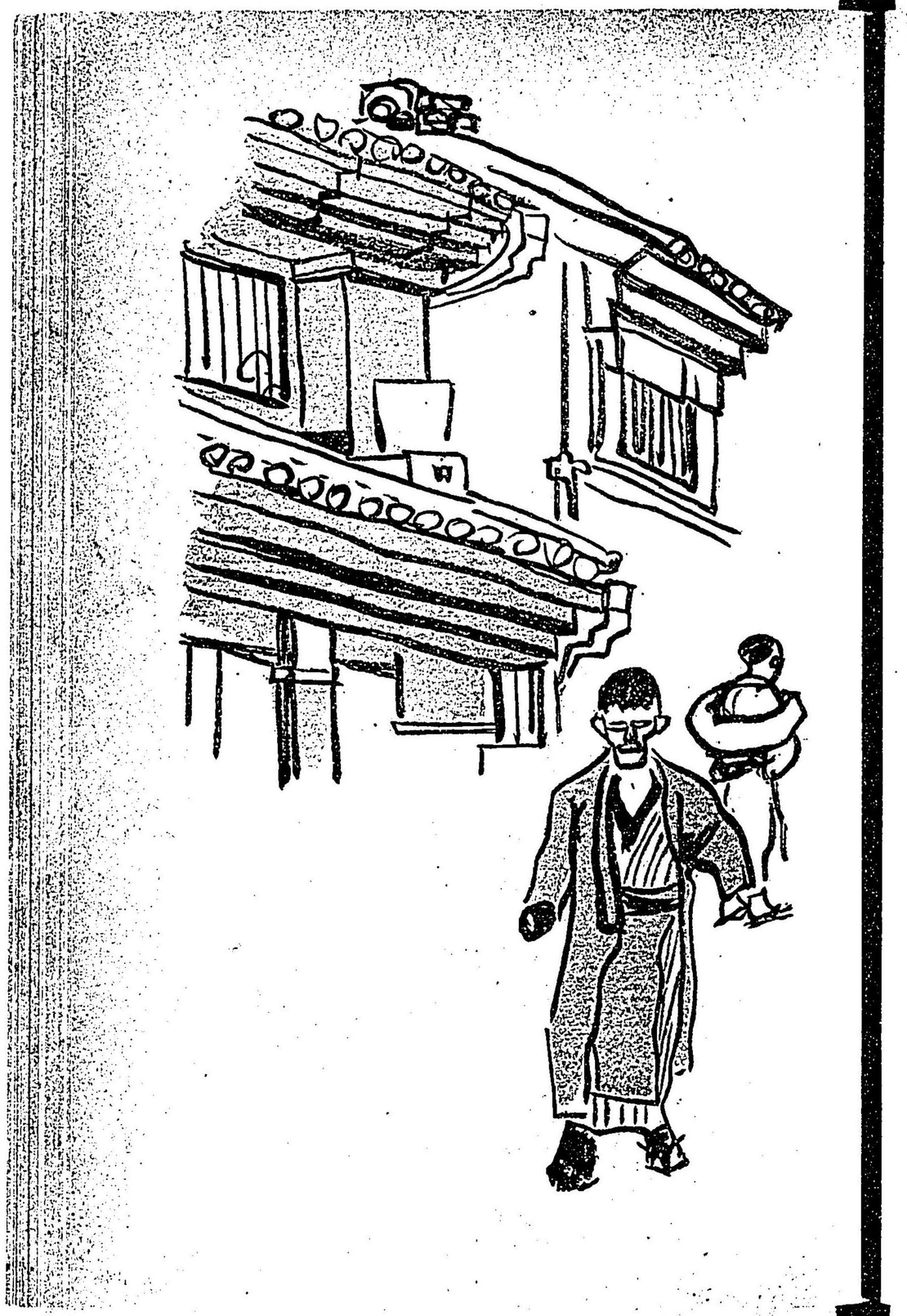
十年前の三崎原は、今は家が建詰つて、堀割に舟も通つてゐる。

女芝居の三崎座は舊い、廣くもない幾町内に、寄席、料理店、西洋料理、何でも娯樂物は有る。球突場も具はる。女の秘密の宿も在るさうな。

此處には、支那學生の下宿が多い。石鋪の片側の路に影を見る、折に支那婦人のおぼつかない足音を聽く。

支那料理が、餘計にある。薄汚れた灰鼠色の姿、戸を洩れる濛々たる煙と、豚の脂臭に、頽廢的の悲慘を感ずる。……豚肉は甘いが、亡國的惰民的の食料だ。

春の夕陽が赤く、三崎座の立幟と、煉瓦の擦褪めた曲る小路を射てゐる。



三崎町電車通に、救世軍の會館が建てられて在る。

目黒羅漢堂

降魔劍と火焔と、不動明王は、我が最も隨喜する神様である。

目黒は、秋は栗飯が名物で、四時何か知ら樹木が茂つて、薄暗いが、神寂びた匂ひがある。

目黒不動尊に往く途中に、有名な羅漢堂が建つてゐる。五百の貌姿活けるが如く、實に目を驚かしめる。

此の羅漢に就て、現代に寔に面白い興味のある傳說が殘る。それは信仰と熱誠との凝結なのだ。

遠い大阪、難波に鐵眼寺といふのに、鐵眼和尙、この高僧は一切經、六千九百三十六卷の板木を拵へた程の人だが、之を作るのに、再度の饑饉の際に屈せず、

笊に紙を貼つたのを、廣い大阪中の街を持廻つて喜捨を集め、漸と出來上つたのであつた。

此高僧の佛弟子に、松雲といふ僧が居た、此仁が一尺の五百羅漢を彫つたが、更に等身のを製作せうと、懸命に努力をした。

松雲は先づ、淺草に居を搆へた。畫は東京中を、出來た羅漢像を車に乘せて、曳歩いた。後に淺野家瑤泉院の御手許金を戴き、苦心十四年で遂と、その五百羅漢は製作を果したのである。

所が、熱誠の緣は奇な不思議、松雲の弟子が亦、五百羅漢堂を建てた。久しく本所に羅漢堂が建つて居たが、一昨年其が、目黒に移され羅漢堂と成つたので有る。

炎と劍の不動明王は尊く、赤裸々の活氣に滿つ羅漢も、現代人の拜跪するに足るものだらう。

理髪床小見

誰も目馴れて、何とも思はぬが、理髪床は、寔に詩味の饒多い場處である。

第一理髪店の空氣が可い、種々の並ぶ壜から洩出る、香料の匂ひが鼻から腦に泌入つて、柔かい心地のよい感じを覺える。

尤も人の神經に因るのだが、日夜の強い石鹸の薫は、室内に殘漂つて昂奮を爲せる。

それに、棚や臺の上、光る銀色器具、瓶の美しいレッテル、額縁、高等理髪店には、特に視神經を動かす洋式の物が有る。

理髪師の振ふ銀光の鋏、輕く使ふ剃刀の膚觸り、椅子に目を瞑る快よさ、銀貨一個で平民的清い快樂が買へる。

農夫が苅る麥の如、人間の毛髪は限りなく苅落つ、同樣價値なき腦髄も毎日

亂費される、斯の如く俗衆の世界は過ぎつゝ在る。

醫師、看護婦、床屋の白い服裝は感じが善い。その頭臚と身體を取扱ふに同一である。

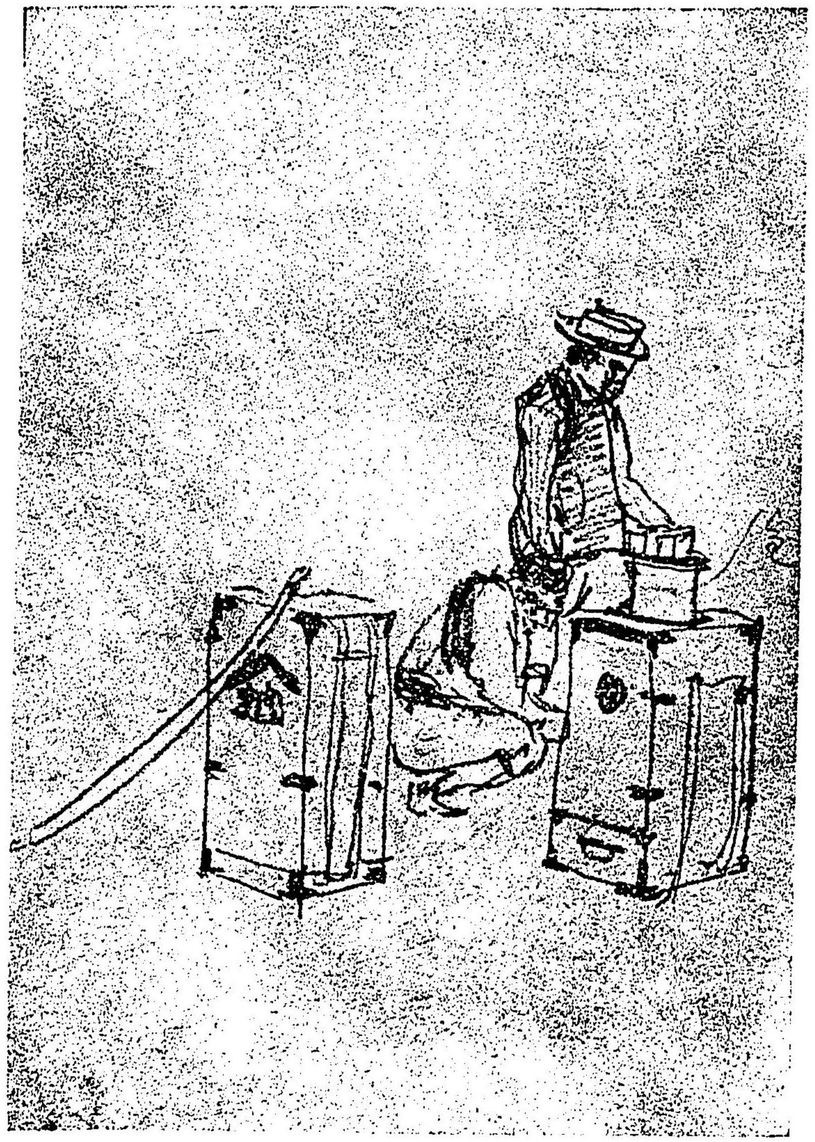
東京の理髮店は、江戸の昔と變らぬ浮世床である。

甘酒賣

甘酒賣は、江戸時代の遺物らしい。今ま東京の市中で、なか〳〵に賣れるやうである。

寒い折には賣歩かぬが、夏の暑い日から秋へかけて、毎日市中を、甘酒賣が「甘い〳〵」と呼んで行く。それが如何にも、人情が淡泊に甘かつた、江戸時代を偲ばさせる。

甘酒を容れてある、圓長い桶樣の器、それが總朱塗で、蓋が恰ど釜のと同じ形



で、眞鍮の金物が所々に施して有る。私は此種の物で、之程風流優雅な商賣の道具を見ない。でハ内容が例の白汁の甘賣で、何と云つても、極めてローマンチックな商賣であるのだ。總の朱塗に眞鍮を嵌めたが、太だ興味詩味が有る。人情苦辛い世の中に、甘酒も宜しからう。

甘酒賣が「甘い〳〵」と呼むで歩くと、東京の殊に貧しい子供は戸外へ駈出す。

都會の暑い日盛り、辻角の樹蔭に、例の赤い桶を置いて、湯呑茶碗に職人達に進めて居るのは、宛で畫だ。

夏の日に甘酒も妙だと、地方の人は思ふだらうが、此處がそれ江戸ッ子の面白いところだ。

新橋の空氣

唱歌からして、小供でも、新橋停車場の鐵輪の壯大、その光景を、幼い腦髓に

も感知して居る。

新橋は、諸國の旅人と、貨物が、空の雲の斷えぬが如く、出入りが實に頻繁である。

銀座通から、足一歩踏いれて、新橋驛近くなると、旅舍から運送店、一寸した飲食店でも、既に旅といふ人間倉忙の印象を、在り〳〵と現はして居る。一帶の空氣が塵埃と、甚く動搖を感ずる。

茲は東京の首腦ではないが、耳だ、足だ、無くてはならぬ必要の場處だ。二十四時休む刻もなく活動する機關車は、巨な煙と聲との勇壯なる傳令使であらう。

往年、花賣娘が居たが、今日では最う可憐な姿が、構内に見られなく成つた。驛夫の黑い服、赤帽、女切符賣の白い指は忙はしい。悉く神聖な忙中の勞働だ、自分は人生は奮鬪奮勵の日の中に、憂きを忘れるのだと信じてゐる。

變色電氣仕掛けの廣告燈は、流石大都會の停車場だけに、高く赤に巨眼を四方

に輝かしてゐる。

上野驛は寒い東北から、新橋は暖い關西から、遠く入込み來る人間に由つて、停車場内に籠る空氣までが異ふ樣だ。否同じ都會の南北の端に、その建物の造作の色から、偶然にも違ふ感じが爲れる。東海道の汽車は音響も陽氣で、温暖い古名所の土を嚙み〳〵馳する。新橋でポーッと息して、吐出される旅客の顏も愉快らしい。

停車場の向ふに、高等馬車貸附所といふが在る。表に其の黑塗の貸馬車が一臺据ゑて、手狹な内部に馬具が懸り、馬の臭が芬と來て、男が浪花節を呻つて居た。

汽車と、高等馬車との對照が面白い。

三河町の人夫

神田三河町に、諸人夫請負處がある。朝通つて觀ると、お釜帽子や、捩鉢卷や、印袢纏、鯉口、古洋服の勞働者の連中が、町内の角に並むで、屯して居る。屈託にも爲らぬのか、平氣で、野獸の樣に晏如として、一日の仕事を待つてゐるのだ。的も無いはかない事と、自分に想ふが、世の中に、其日の職業とパンは偶然湧いて來るものか。それとも、此種の人々に取つては、平常の生活は、そんな事を超越して、安不安、一日の飢餓抔とは、習慣と成つて居るのか、何う視ても、野に戯れ伏す獸のやうで平然たるものだ、併し有繋に凝と佇立で物を言はない。新しい草鞋を銘々穿いて居るも、惘然である。

野に甘い果實が在るやう、都會の何處に今日の職業が、彼等を待つのであらうか。

いま美しい朝日が、勞働者の仲間の着物を照し出した。

繪葉書と繪草紙

繪葉書熱は、近來衰へたといひ條、東京の街には、神田には同町内に數軒も、花と並べ懸聯ねた、綺麗な繪葉書舗が在る。

一目に見て、實に感じが佳い。藝妓の俗的なのや、西洋美人の裔の露はに、冷たく褪めたのや、草花や内外の風景や、色々様々であるが。此處にも、時代の空氣は現はれてゐる。この頃では、新婚旅行の頗るハイカッた繪葉書、青春男女の甘い戀の囁き、各様ホームを文句入で寫生したもの、金泥銀箔を浮かした、クリスマスカード式のも有る。棚に積重ねた、白銀製のアルバム等追々贅澤になつて、小形で手に匂ふ繪葉書にも、浮世時代影の映つてゐるのは、極めて面白い。繪葉書の中にさへ、神も魔も隱れてゐる。

歌舞伎の新狂言は良いとして、角力のなどは好ましからぬ、而し之も時代一面

の好尚だ。英雄の肖像や、日本歴史教育繪葉書や、それに、基督一代記を六枚一組に撮つた葉書や、新しい物が店頭に現はれてゐる。

尤も其中でも、紙質繪畫と上品優雅なのは、本場の舶來物に多いが、獨佛國の妖艶な、熱帶國の亂紅の花の如な、金髪の女優の嬌態各種等、繪葉書舗の、冬の空氣でさへ暖く、濃厚に爲て居る。その活きて輝く瞳、温熱い泉の溢るゝ計り、巧みなる表情、些細なハガキの上ながら、歐人の激しい人間美、自然旺盛の赤い活力を、自由自在心の儘に發揮して居るのに、驚嘆する。

東京の一繪葉書店に、世界各國の風俗人情を、讀知されるのは、花の文明の餘得であらう。

徳川時代に較べると、繪草紙屋の全盛は、むろん衰微をした。江戸の絢爛な錦繪、浮世繪が熾むに、江戸人士にヤンヤと迎へられた、其の時代から見ると、目下の繪草紙店はまりで、華やかな温かな濃夢から醒めた、アッケの無い、冷たい

淋しい夢の跡のやうだ。

店頭、色彩つた歴史畫、種々の雙六、また美人風景物も在るが、以前の錦繪時代に比べると、東京の今の街に、繪草紙店の存在をさへ、疑問とさるゝ位である。日本橋や下町抔には新吉原細見が吊垂げてある。

有繋、流行は那の石版摺の、血の氣のない古い美人畫は無いが、此頃では、ナポレオン、ビスマーク、我が南洲翁の稍大片な石版摺が、小さな舗でも懸つて居る。

江戸人の趣味を代表した、歌舞伎俳優の似顔の錦繪や、江戸名打の戯者、町娘の浮世繪を表に掛並べて、通行の男女の眼を眩しう色彩に燒いて、翫賞を恣まゝに爲せた、其の時勢から見ると、或る意味に於て、時の力は人間の情を減殺し、萎縮させる。是に於て理智の進むだ近代人に煩悶生じ、底の冷たい文明に對して、甚だしい矛盾衝突の思想が起る。

頭臚に霜を置いた老人は、何でも昔が好かつたと云ふ。若し當今の繪草紙屋の前に、曲つた腰を据ゑさせたら、明治になる前の、派手な豪快な、名俳優が一枚の錦繪を思出してさへ、弱い眼に涙を湛へて、その氣樂な美的生活時代を、口を極めて老人は讃美するだらう。

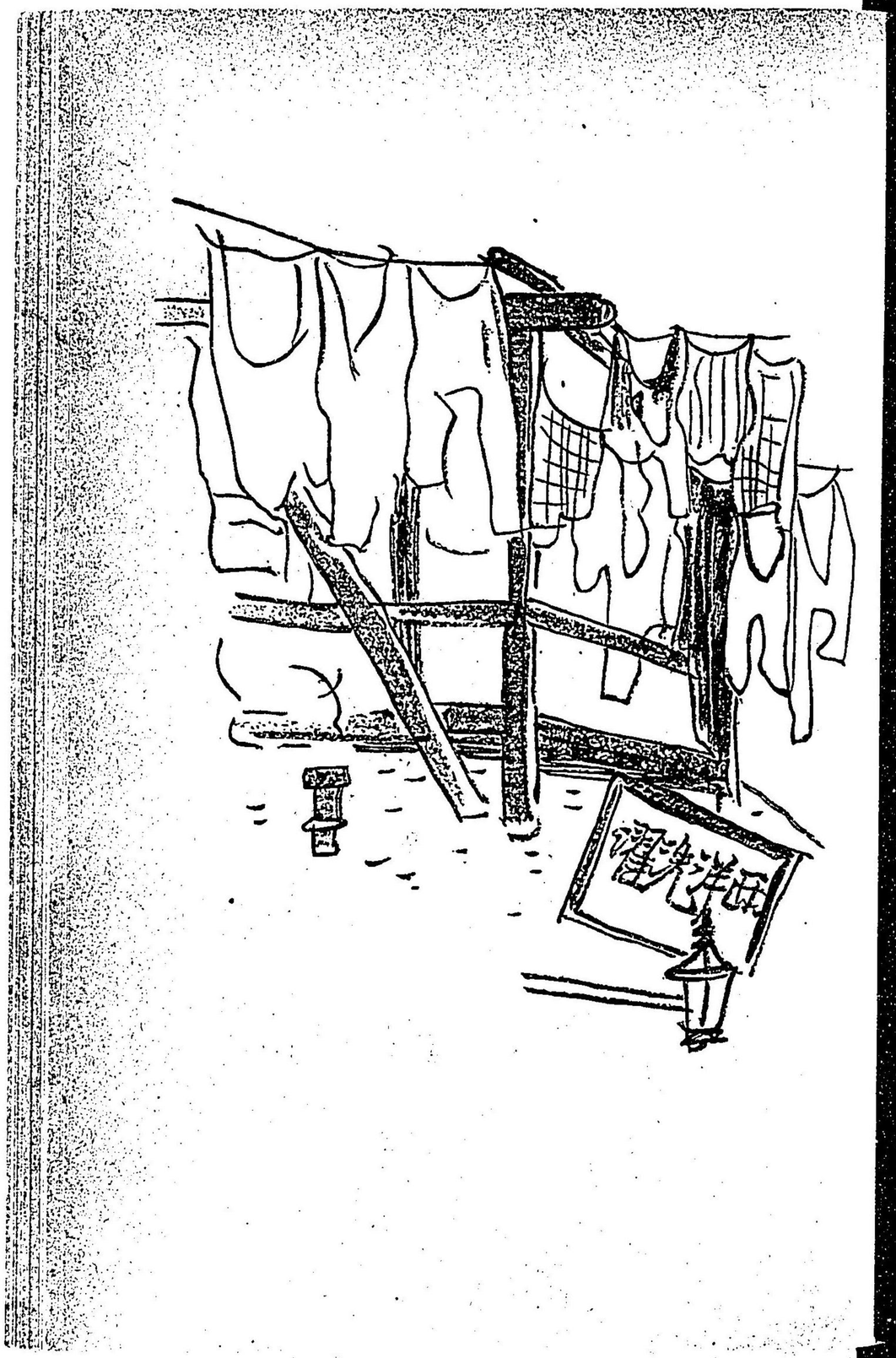
東京の繪草紙店に、美と情の悲哀が有る。

ペンキ色看板

文明は或は、ペンキの色から、産れるとでも言へる。ペンキは都會に匂ふ、日に新たに咲く花であらう、惡ごいのは近代的の香りだ。

東京の街に、ペンキ塗請負所とか、各種看板書畫應需とか、華やかなハイカラな、看板を軒に上げる、ペンキ師の家が大分殖えた。

屋の周圍に、流行美人姿や、風景、花卉の類を、色彩豊かに綺麗に塗つて、廣



告的に自家吹聴する家が在る。時に元祿姿の、頗る濃艶な美形の雪の顔が、ハッキリした眸で高い屋根から見卸す。下を通る血肉生肌の女子、顔色なく袖に面を掩はしめる。――文明は、白粉とペンキとを混一にする、つまり、世界物質はペンキを以て、或點まで美化される。

ペンキ師の、靜な家の内を覗くと、舖の入口一面に、黄、赤、白、黑や綠や、色々のペンキ油が、雜然として器物に冷かに燃え、邊りの床板に、落葩のやう零散つてゐる。

ペンキ塗の看板に、折に油畫に劣らぬ逸物もある、町で服裝の異つた塗師を見ると、あれは薄倖な、洋畫家の落伍者で無いかとも思ふ。

猫されの漁師

東京から三里、深川からまだ向ふ、猫さねといふ漁師町が在る。東京で青柳鍋

で喰ふ馬鹿貝の捕れる土地だ、そこは島に成つてゐて、人家の周圍は河だ。小唄にでもありさうな。

此地に千人も漁師が接む、大變に氣が荒くて、盛んに蠻氣に充ち溢れてゐる。嚴々たる裸體漢は見ても怖いらしい。

猫さねの湯屋へ這入つて、湯の加減が熱く、うめても爲たが最後、湯屋の戸外へ出るや矢庭、風呂を先に上つた男共は、オイ若いの御馳走してやる！と大勢に擔ぎ擧げて、前の河の中へドンブリと投入れて、知らぬ顏で引揚げる。東京から仕事に往つた大工左官が、知らずにヒドイ目に會うさうだ。

警官抔でも、浮かと手を出せぬ程の亂暴さ、廣い砂ッ原で大ビラに博奕を打つて、巡査が行くと、直ぐ蜘の子の如うに、散り逃げるさうだ。

然し氣が荒い割に、天眞自然な人の好い所も有るとか。

ゴルキーの小說に描く、露西亞の或種の浮浪漢を想出させる。

赤門前

本郷赤門前の通りは、何となく一種の空氣、情調とが有る。ゆつたりとした、大まかな、物に拘泥せぬ、學者風が、赤煉瓦に鐵柵を繼いだ、學校外の大道に、揚る黄塵に混つて漂つてゐる。

併しドコとなく、華奢な、風流才子的な、光る靴の先にも、デカダンに行きさうな、趣きが見えぬでない。

あの古びた赤門を入つて、大學病院の側を裏門へ抜ける道、長い石敷に添つて、秋の落葉の景色が、寂しくはあるが、私には眞に佳かつた。私の冷たい青い額に、枯葉が落當つて痛をおぼえる程でなく、詩人ベルレーヌの悲嘆の歌の情調を、心にしみ〴〵と感じた。

神秘詩人、小泉八雲氏の逍遙された池畔、華々しい一生を遂げた、高山樗牛を

も偲むでみた。

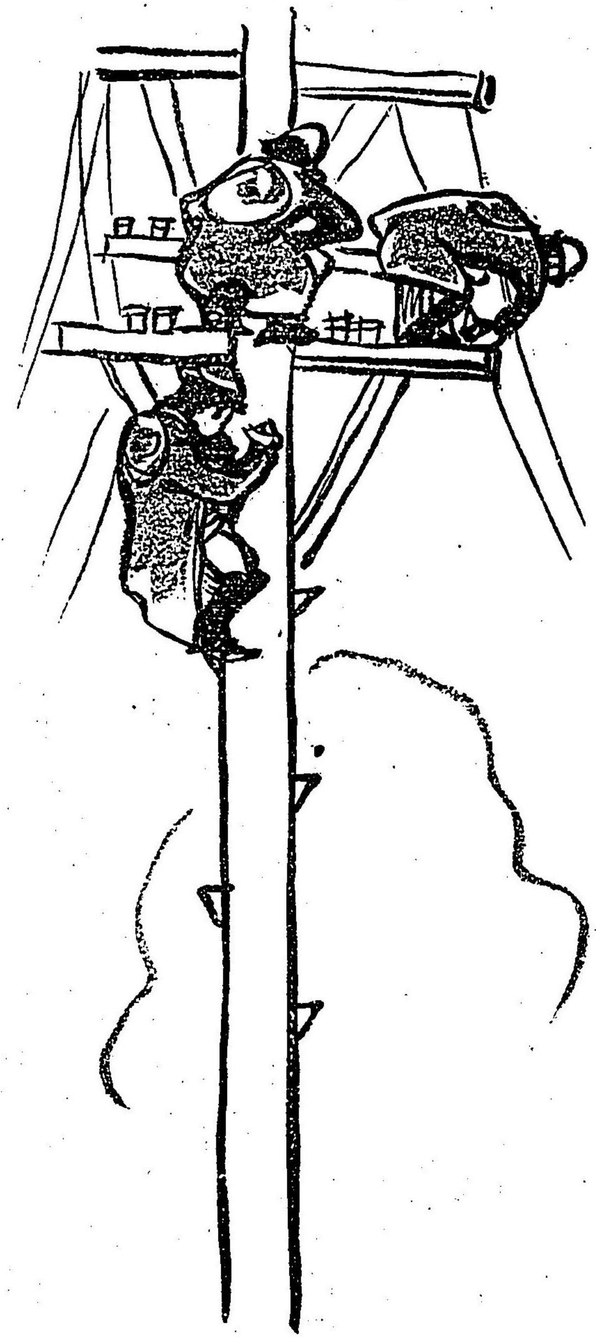
赤門前の西洋料理、多數の文房具店も、他町と異つた、下卑てなき、貴族風の所がある。

古赤毛布を腰に卷いた、馬丁の乘る板橋通ひのガタ馬車が、本郷大學前を、プ〜〜喇叭吹いて通る。

水菓子店の色

東京の水菓子店、即ち果物店は、都會の一小美觀である。甘味の空氣が沈むでゐるやうな、店の内に、狹いにしても色々の果物が、自然の色と光を見せてゐる。それが鮮かで、寔に綺麗だ。

西洋の市場、殊に南洋や、植物と果實の天國の熱帶國、印度の賣場は知らない。東京の水菓子舗の夜は、白熱のアセチリン華瓦斯を點けて、累々と置並ぶ黄や、



紅や、褐色と紫と白と、柔かい滑かな光線が、いろ〳〵の果物の肌に浴せ込つて、唯眼に見入つてさへ、太だ氣持が好い。甘い、酸いやうな、一種の匂ひも、快よく官覺を刺戟する。

東京の水菓子店は、上方の如にイヤにごてくさ並べずとも、色の配合と、器物の置き樣に注意するから、清潔で賑かで、そして單に感じが可い。

琥珀色の柿、蜜柑、紅いルビーに似た林檎、雪の肌を藏くす梨子、菓子の如な肉厚いバナヽ、パインアップル……と數へるにも、舌がだるく爲る。

赤い手絡の、若い新婚の妻君等が、紫の繻子の帶の間から、小い蝦蟇口を指撮む如に出して、買物をする風は、一種の明治の浮世畫で有る。視線が、冷い果物の面に落ちて、中々に情がある。

太古、アダムとイブが禁園の果物を盜喰つたが、人類の罪の初めだと謂ふが、今日では、少女の胸の桃色の紅い心臟は、慥に其の甘露の、強い人を誘ふ魔力が

ある。然し、情美情熱の豐かなハートは、現代ひませになつて、漸次に遺憾にも、世間に見られなく爲る。――私は、南歐伊太利の藝術文學は、恰度甘い〳〵齒も舌も、溶融け落ちさうな、紅い果物の樣だと想ふ。吁伊太利國の上に照輝く太陽と、我が日本の空の太陽と……。

東京の水菓子店も、追々舗の飾具合が、その果物と調和して、西洋風に成るやうだ。

ちよつとした店に、糸で拵へた可愛い〳〵網に、小粒の金柑が十個計り、入れて吊して在る。小供は屹度あれを欲しがらう。

詩的上野公園

蒼い廣い空に、鳶が三羽、ゆるりぐるり、巨きく環を描いてゐる、その下の、黑い杜が上野の山だ。

堂々たる白堊の博物館、前に砂利の廣道の右、文部省美術展覽會の開かれる建物、博覽會の名殘りの、小い音樂堂ガランと寂しく。長く立續く櫻樹は花にも雪にも佳い、春秋に廣場で、紅白の幔幕を引繞らして、小學校の運動會が催される。

夕景、帝國圖書館の側路から、高い窓の內に、電燈が花の如うに、澤山點いてたのを見た。何となく學びの燈が床しい、入口の所でドヤ〳〵階下に、穿物の音もうれしい。市中の下宿へ學生が歸りを急ぐのだ。

ピアノ、ヴアイオリン、鳥と風との諧音律が、常に絕えず構外へ洩れる音樂學校、スグ傍の、シンとした美術學校と、上野の藝術趣味の中心だ。花模樣メレンスで包むだ樂器擁へる、艶な姿の女學生と、カンバス携へる、頭髮を長く詩人のやうに、綺麗に伸した美術學生と、巴里の美術音樂學生の日常生活を偲ばせる。

太古野生的、赤條々の象と駱駝、百獸王の巨冠を持つ荒獅子の居る動物園。嵐

の烈しい夜、これ等の動物が咆哮ると、上野の山の杜の鴉が、驚駭いて羽搏きをし、樹から落ちる。現代世界に誰ぞ偉人豪の、此の大聲を、人類の大群集に向け發し得るは——。

杉の古木の蔭も薄暗く、じめ〳〵した草地、五重塔は謎の如に突立つ、東照宮の御廟は朱と金泥の輪煥神々しく、徳川全盛の砌、諸國大名から奉献した高燈籠が、石疊の道に青苔を附けて列ぶ。

眞白い鳩が低く舞ふ、此の邊り一面、例の彰義隊戰爭の折には、官賊兩軍より擊出す彈丸雨霰の如く、濛々たる黑煙白塵は、樹間を幽靈の樣に縫ひ、此處三百年夢みた空氣が、動搖し破れた。今なほ古木に手を當てると、瞭かに彈丸の痕を探れる。

上野廣小路へ、髮の如く眞直に走續く道筋に、春は櫻花は、白雲を空に匂はす、東京中の男女は浮れて、こゝに眞個爛熟した、盛りの青春を味へる。

元祿の太平樂、頽れかゝつた華麗を偲ばす、紅紫の葩重い櫻も、向ふに五六株ある。翠の色の松、夏は江戸ッ子的の若楓も燃える。

高臺からは、淺草十二階の塔、新吉原の濃い、温かさうな色ある煙、深川の方面は高い會社の煙突、本所の方も、千家の黑い瓦屋根が、一目に觀える。スグ下には電車が、ギー々々都會の一種の呻きを出して駛り、上野の汽車の笛はボーボーと、都會田舍と大旅客の巨聲を吐く。

上野の幾百年の雪霜に誇つた、老木が鋸の光る惡魔に、漸次と伐倒されるは傷ましいが、何と言つても上野は、帝國第一の都市の大公園である。

不忍池に降りる路、青い樹の蔭で、時折耶蘇敎の傳道師が說敎をしてゐる、老婦人が地面に小型のオルガンを据ゑて、讃美歌を唱つて居る抔西洋式だ。

赤い義人の血の如な帽子を着た、例の救世軍の士官が二三人、罪惡と改悔を熱心に演說する。楓の葉が繁る綠の背景が、宗敎畵のやうだ。

阪を斜めに爪先下りに、不忍池は濁る水を湛へて、夏の青々した、水から拔出た潔癖な男性風の荷葉、薄氷が碎け浮き、方々にピョコリ〳〵と、黑い骨の如な枯蓮の莖もおもしろい。鴨や小鴨が凝凍つたやうに動かぬ、夜は池の中の割烹店の燈火が、水に逆まに赤う映り、池を廻つて常夜燈の硝子が飛々に夢のやうだ。

中の島の辨財天參詣者の下駄の音、池の緋鯉眞鯉に麩を與る女小供は絕えぬ。上野で撞く鐘はこゝの水に消沈む、觀月橋で明月を、瓦斯の白光と一しよに見るも一興。以前の競馬場の草の跡に、博覽會の殘物の西洋造の白壁が、時代の渦中に默つて、立もだえて居る。所謂近代人なる者も、軈ては此の建物と同じ運命と成るのだ。時代は空の雲のやう、物質も、人間の頭の上をも日に〳〵飛超して行く。

池の東から、本鄕臺の方を觀た景色は、眞個のパノラマ式だ、大學のクラシックの建築物の頭の先が、茂る盛んな木立の間に、象徵的の詩のやうに白や灰色

にみえる。萬物が寂れる晩秋の節、眞赤な大きな夕陽が、いま西へ〳〵沈落ちる一瞬間！猩々緋に火と燃爛れた、燒雲の裂目から、思切つて大膽に直射する本鄕高臺の、建築物の上の濃い、色彩色熱の大觀……これは刹那の美とは云へ、西斑牙等に行はるゝ狂熱の油畫式で、太陽の美、雲の美の極を、恍惚として、睫も眩しく燒かれて、併し仰視ることが出來るのである。都會の若い詩人畫家は、是非とも、池の東の端に佇立まねばならぬ。

朝に絹の布巾をかけた樣な、池の端の待合、夕暮、粹な軒燈が灼く刻になると、白粉艶な仇者と歌と酒と、耽美脈の喜ぶ、觀樂の世界だ。楊柳が淺い小流に、梳いた綠髮やしだらない姿を浸ける。

廣小路の饒山な飲食店は、田舍漢は、殊に夜は素通りは六ケしい位な景氣、頭店の白熱の花瓦斯が、醉つた眼には、靑色に紫にも見えやう？晝を欺むく遠くまでの、煌々たる廣告塔電氣燈の光は、文明の有難味は、寂寥の詩人でも、冷たい

涙を流すほどである。廣小路の、夜の瓦斯と電燈は、田舍の石郎をも柔靡なデカダンにする、光に霧の魔氣魔力が充ちる。

上野公園の四方は、大都會の呼吸を飽かずに、疲れずにやつてゐる。

南洲翁の銅像

西郷南洲翁の銅像は、上野の山の重鎭だ。漆黑の巨大なる、野人姿の銅像は、今も薩南の荒々しい、而も男性的の暖かい風が、厚い鑄鐵の裾から、仰見ると、いつも捲起るやうである。右手に携へ牽いた鐵の獵犬ですら、秋の上野の空氣には、ワンと高く臺石の上で吠えさうだ。

我が南洲翁は、東洋人種のコセ〳〵した弊の無い、堂々綽々、それで威は激しい波濤の如な、世界的偉人である。花も潮も暖かい、日本の薩南に產れた、情に富むだ熱血男子である。

西郷翁の太きな、丸いやさしみの兩眼が、東京の八百八街を瞰卸して居る。上野の丘から——。

紙玉を雪と、諸國の旅人が、銅像に投げてゐる。之も渴仰の美なる信表であらう。

彰義隊の墓は、線香のにほひの絶間もなく、ついで會津少年白虎隊自刄の油畫は、その傍に血油に掛つてゐる。

暗い谷中の墓地

——落葉焚く煙——

谷中は、東京市の大墓地だ。青山の方は華やかな匂もする墓地だが、谷中は杉の太い大木が多く、晝も暗い心持がする、陰凄な一種の勁い空氣に充ちてゐる。上野へ、根岸へも抜ける道で、墓石は場所だけに、風流人、學者、豪傑肌な人

のもある。

谷中墓地の入口に、先づ雲井龍雄の墓は、青勝の滑かな自然石で、その稜のある菱形は、渠の痛快な覇氣を現はして好い。龍雄雲井君之墓表と刻つて、天下奇傑之士の文字は、碑銘の全てを語る。背に男松の黒い鱗膚がヌッと突出て、詩的英雄に、枯れた小輪の黄菊花が挿される。

隣りに、南部浪士、相馬大作之小な碑。明治十五年、市川右團次が當狂言で、此處へ建てたものらしい。事實大作の墓は千住にある。

有名な假名垣魯文翁の碑は、鐵柵の中に奇體な墓の頭を傍に埋め、種々の木の植込、變つた文人丈けに、甚だ趣向に凝つたもの。妙な風な石に唯猫の顔を、細くちよつくら刻むである、横に別の目標しの棒石に「かなかきろふむ」とあり、眞個雅號猫々道人の碑に垂かぬ、銘は例の柳北成島翁が撰してゐる。

谷中を、ズット奥には、明治の雄辨家、馬場辰猪の碑は、白い歐風の花崗石で、

辨舌家の墓として、長方形の先の尖つてるのが佳い。明治二十一年十一月一日、卒於米國費府と裏面に。米國自由の綠邦にとはいへ、男盛りの三十九歳で他境に散つた花が傷ましい。

壯士來島恒喜の墓は、石肌の荒い蒼黑の、スッキラと男らしいので、うらに廻見ると、二十二年十月十八日行年三十一、自殺した壯士の墓前に、榊の葉がドッサリと手掴に山と手捧げてある。

其他、中村敬宇、小中村清矩、佐藤尙中等、諸博士の立派な墓碑もある。茶山花と、椿と、四季の花卉と……。

谷中には、狩野派の墨繪の如な、蒼古の天王寺五重塔は、無くてはならぬ價値のある附物だ。薄く夕日を浴びた活ける美術は、現代を脫却超越してゐる。

塔と間を置いて、高い銀杏樹は、秋に燦盛に黃金の葉は燃え、且つ陰欝な谷中を大きく照らす。生々と血の色を、冷石に濺ぐ紅葉もある。

古びた鼠色の頬冠をした、墓守や、備れの男女の人夫が、廣い直い路で、晩秋に墓地の樹木の落葉を、堆く盛つて燃やす。枯樹、紅葉、櫻の病葉……有ゆる落葉を焚く白い煙は、柔かに靜かに、墓境に迷つて、細く雲ともならずにスイ〳〵と消える。觸るも熱くなさゝうなチロ火が、ローマンチツク文藝のやう、地を暖めて赤うに燃える。

あはれ谷中の、謐靜な落葉焚く煙火！巨大な現今罪惡の塊物の全世界も、これに投げ入れて、以て淨めの火の、洗禮も受けられさうな、此の趣味は、東京は谷中の墓地でなくば、味ひ見られぬ。

上野へ通る墓途も、死人の殖る墓石で、追々迫つて狹くなる。おつては人口の增加と共に、墓地問題が東京市を噪がすで有らう。

谷中の森には、鴉が夥く棲むでゐて朝晩啼く。

毒婦高橋お傳の墓がある、彼女の辭世に「しばらくも望みなき世にあらむより

渡しいそけや三つの河守」

菖蒲湯と柚子湯

熱い朝湯は、江戸ッ子肌の職人連が、好むで飛込む所だ。

東京の風呂に、菖蒲湯と、柚子湯とがある、孰らも洒落て、小氣味の良い物だ。

菖蒲湯は其名の頃、柚子湯は年の暮で、この時は錢湯は無論大入である。

波々沸いた湯槽に、青色の切菖蒲が、刀の身の如に幾本でも浮いて居る。一種の辛辣な匂ひが鼻をおそひ、青いのに觸つたら、男の膚が切れる程氣持が好い。

柚子湯は亦、特別の趣味が有る。黃色な柚子の輪切にしたのが、湯のあちこちに白う浮いて、寔に柚の何ともいへぬ佳い香りが、强く官能を刺戟する。赤い文身の大漢が浸つて居るのは振つてゐる。

普通の風呂で、聲自慢が、背向けで顏を湯槽の板に喰附けつゝ、新内や浪花節

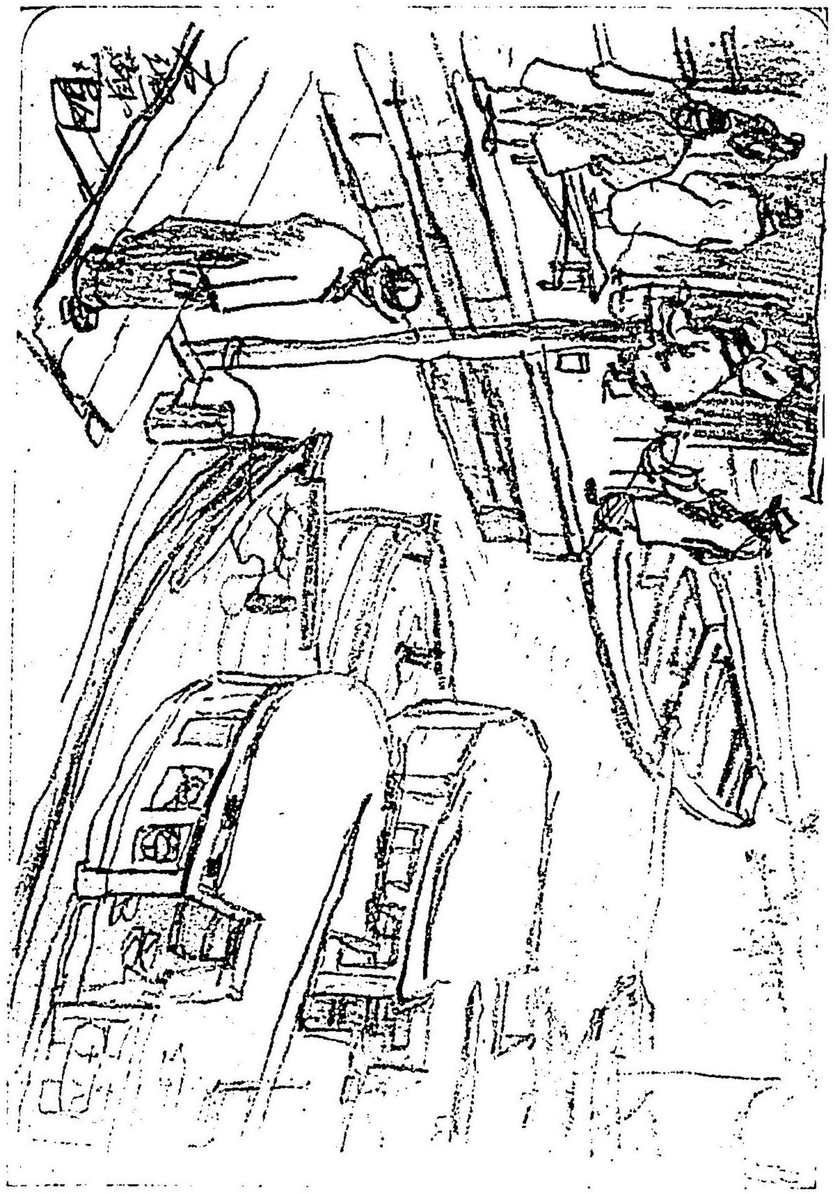
を唸つて居るのを見受る。之も江戸ッ子の秘密主義を嫌ふザツクバランの所だらう。

永代橋と湊河岸

名の好い湊河岸は、京橋區に在る。小い灣の如に成つて、左程廣くはないが、湊といふ丈、傳馬荷足等の大小船が、常も輻湊して居る。

古朽ちた、老爺の樣な、ズヾ黑い被布、檣の少い用に立たぬやうな巨船が十艘も、固つて淀泊して居る、無論荷物船だが水上の古强者だ。素人が陸上から廢物と觀ても水の上では案外然うでないらしい。

スグ横向ふに、東京灣汽船會社と記るして、倉庫が在り、石炭の笊が重ねて轉がしてある。潮の水は薄黝く濁つて、ダク〳〵と流るともなく流れて、兩岸と饒山の船舶とを嚙嘗めてゐる。



前面に、何の會社か眞黑い建物、眞黑い數本の煙突から、頻りと黑い煙を空に吐く、シャツを着た人の影も小さく見える。

問屋らしい白塗の倉庫が、並んで見え、それに夕日が照射して水面に落ちてゐる。

四角な、長細い、灰鼠色の帆を揚た舟が行く。汪々と而も流れる音も無い水、湊町の渡場に佇むで、轉た水上生活の呑氣さ、無駄な人生の倉忙を思ふ。

波々した灣に、小舟は獨樂の如自在に動く、波の老爺が折々、飛沫いて戯れて行く。鷗の白い翼が夢のやうだ。

湊河岸の渡し、些と離れた水に、一艘荷舟が息む。船頭の山の神らしいが、船縁からバケツで水を汲上げて居る、毛糸の襟卷の小娘が、岸へ架木を下駄で渡つて來た。

澤山の船の腹の底では、廣い河幅、日夕淡水と海水とが、深沈して相戰つて居

るのだ。世の中に詩人のみ、心耳に獨り聽くことが能きる。

今ま、夕陽がパッと薄赤く黄に、湊河岸から前面を廣く、倉庫も、向岸も、船といふ舟に悉く、冷い光りを浴せた、――漣がキラ〳〵と灣内に産れた。

湊河岸には船乘の養成所が在る。スグ側の小橋から、東京府産火山灰の、赤い臓がみえる、火山灰とは振つてゐる、其れも淺間山ので無く、東京産だから一層だ。

房總逗子小田原、三崎の方へ、蒸汽船が出る靈岸島は、近傍だ。魚臭い旅客と荷物は、年中絶えた事がない、汽笛は京橋日本橋の、濁つた空氣を顫はせる。

湊橋を越して、電車の通りに出て、左へ往くと、昔から名打の永代橋が架る。寒中でも名が床かしい川風が、頬に袖に心地よく吹く。

此處となると、河の光景が南北に濶々と全くの水の世界だ。帆舟が無論幾艘も上り下りを爲る。

月島の方に小松がショボ〳〵、遠く品川迄も、一目に出來さうだ。海の潮氣が雲とボカシた樣である。

上流の向ふ岸に、並むだ幾棟の倉庫が、黄な色に夕日が、名所圖繪の如うに濃く古く觀せる。

深川セメント會社の、太い赤煉瓦の煙筒が、盛んに白い煙を雲と吐いてゐる。那の異樣な形狀と、白い熾な煙が呪はれてゐる。

江戸時代から、上潮引汐……舊い永代橋は、東京と爲つてからも、文明的詩味と興趣の中に、立派に架つて居る。

小塚ケ原刑場の記

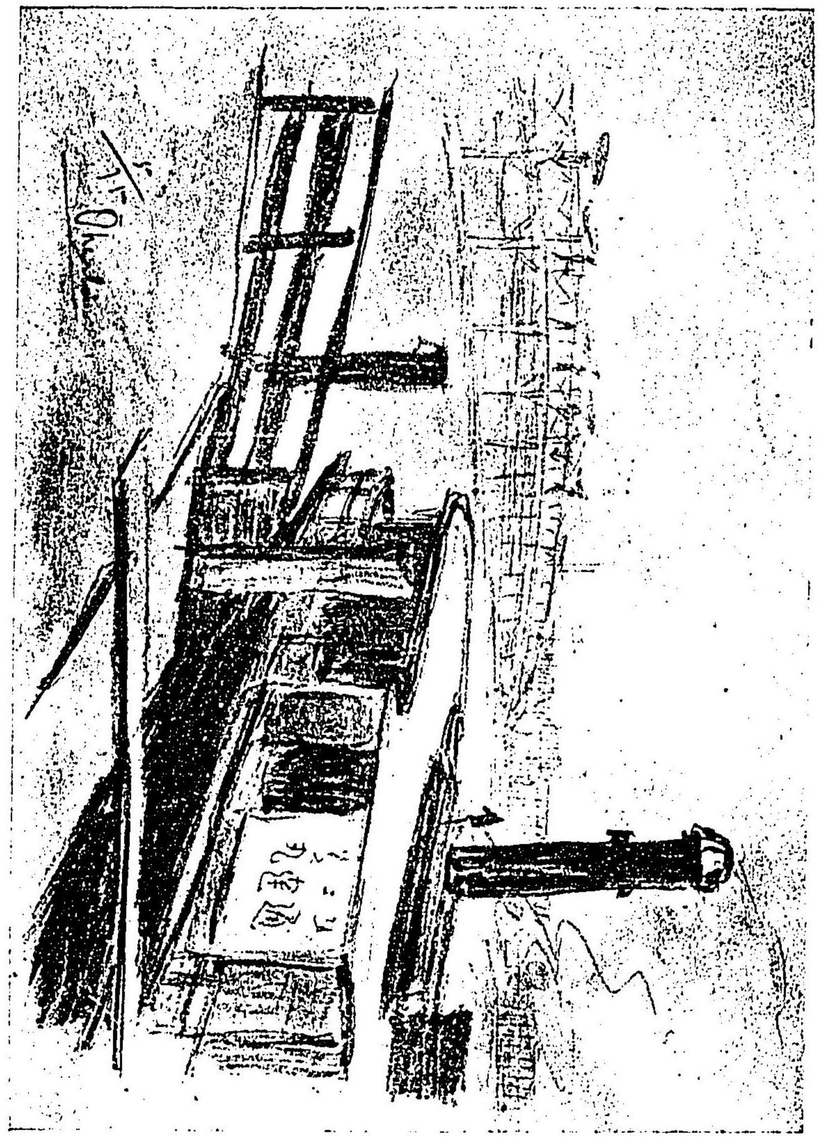
（春四月彼岸過ぎ、天會々大雪を降らし、櫻花の美靈

みな雪に哭くの日）

春三月二十六日、友林外君と千住小塚ヶ原刑場の跡を見舞つた。

此日朝から陰欝な曇り模様で、天に一片の雲さへも浮いてゐない。――地に動き行くは淋しい二人の影！

電車を淺草雷門の前で降り、馬道の通りを北へ北へ住く。昔の刑場の跡を訪ねるのに、馬道とは既に妙な感じがされる、牛馬の骨の捨處彼の仕置場へ馬は哀しげに風に嘶いて誰かゝ謠ひ行く姿を偲ぶ、暫くして葬式に出會ふ、涙に濡れた男女の青い顔が、蓮の銀華金葉に照らされて、死人の臭いが町中を充たす。

一臺の泥土車が二人の前をズン〳〵往く、甚だしい臭氣を後に殘しつゝ大に癪だが、數歩先んじて越す事は能ない。詩人は何れの時代でも俗惡な社會から、一歩先んじねばならぬと考へ乍ら、早や日本堤に來た。

石屋抔あつて愈骨ヶ原に近い心地がする、日本堤、昨宵血を吸はれた吉原歸りの客だらう歌も無い悄然の姿、千住まで水害の悲慘な跡を眺めて、多くの襤褸